

平成 28 年度
「東北地方における学生ボランティアの強化」
実施報告書

平成 29 年 4 月 30 日
一般社団法人ワカツク

内容

1. 事業の背景	3
2. 事業概要	4
■事業目的	4
■事業目標	4
■事業内容	4
3. 事業成果	9
4. 事業の課題点、次年度の展望	12
5. イベント等、実施内容の報告	15
1. GAKUVO 東北学生チームの運営支援	15
(1) 学生チームを含めた定期的会議、個人への定期的振り返り	15
(2) 40 のボランティア団体との関係構築、情報収集・発信	15
(3) チームメンバーに向けた研修会の企画・運営の支援、実施	16
(4) 事務的業務のサポート（活動拠点の確保や各種手続き等）	16
2. 社会貢献活動を体験できる場と環境の創出	18
(1) 学生団体の合同説明会や活動表彰等を学生団体等と協働開催、団体間の連携を 促し継続的にボランティアが体験できる場を創出	18
(2) ボランティアセミナーやフィールドワーク等、未経験者向け体験の場を大学等 と協働実施	43
3. 若者が社会に挑戦しつづけるための支援体制の構築	52
(1) 団体の活動理念・方針を明文化するための講座	52
(2) 団体のリーダー・新しく活動を立ち上げたい個人などに向けた研修会	53
(3) 活動を体験した若者の振り返りを兼ねた研修会、高校生を含めた下級生に伝え るセミナー等の実施	65
4. 課題と若者をつなぎ、活動する若者を地域で支える環境整備	68
(1) 大学でのカリキュラムの運用サポートと高度化	68

(2) 地域コーディネーター養成講座の共同開催.....	69
(3) 地域課題の可視化に向けた調査	71
(4) 学生の主体的な活躍を促すメンターの発掘.....	73

1. 事業の背景

東北地方は、少子高齢化や過疎化など、社会課題が山積する地域である。こうした課題の解決に向けて、NPO やソーシャルビジネスが注目され始めた。また、2011 年に発生した東日本大震災をキッカケに、東北からの地方創生を目指す活動が増えてきているほか、改めて若者によるボランティア活動などを通じての社会参加の動きがクローズアップされ始めてきた。

しかしながら、震災発生から 6 年が経ち、復旧の現場で活動していた企業、NPO・NGO、ボランティアがその役割を終え、各々が従来行っていた活動に戻る動きは一層加速している。また、活動の継続が必要な領域においても、発災から時間が経つにつれて、活動に必要な人、金などの資源を継続的に集めることはますます難しくなっている。

仮設住宅から災害公営住宅の移転や被災した土地の整備、産業の再興などが進むにつれて、見た目上の復興は進んでいるが、課題がなくなったわけではなく、本質的な課題はより見えづらくなり、また長期の取り組みが必要な課題が増えてきている。さらに、「消滅可能性自治体」という言葉が話題になったように、地域の持つ課題は被災沿岸地域に限定されたものではなく、それ以外の地域においても、自主的な取り組みとそれを支える基盤づくりがますます急務である。今年度は熊本地震や台風 10 号による豪雨災害などが発生し、大規模な災害はどこでも起きることが改めて浮き彫りになった中、ひとりひとりの取り組みへの参画は地域の防災力を高める意味でも大きな意味をもつ。

これらの背景から、限られた人が課題解決にあたるのではなく、東北の人々が手を取りあい、活動していくことの重要さはさらに増している。特に、多くの時間と可能性を持つ東北の学生の力は重要な役割を担う。

ワカツクは、2011 年の設立以来、学生のボランティア活動やインターンシップなどを通じて、東北の課題に挑戦する若者を増やす活動を行ってきたが、2012 年度からは日本財団の助成のもと、Gakuvo（日本財団学生ボランティアセンター）と連携しながら学生ボランティア活動の推進を続けてきた。これらの活動は、学生のボランティア活動を推進し、こうした活動に取り組む学生への支援を行うことで、復興活動のキッカケをつくと同時に、東北という地から山積する社会問題の解決を担う人材を育成することを目的に実施し、様々な活動に携わるきっかけの提供や、様々な現場でリーダーシップをとって活動できる人材の輩出といった成果を得た。

本事業は、これらの成果を引き継ぎながら、中長期的な担い手をさらに増やしていくため、受け皿となる学生団体やその構成員のキャパシティ拡大や、課題と若者をつなぐ地域コーディネーターの養成、それらを通じた地域の若者によるボランティア・社会貢献活動の見える化を目指して実施するものである。

2. 事業概要

■事業目的

学生のボランティア活動の支援を通して、山積する社会課題の解決を担う担い手の育成を目指す。2018年までに学生が社会課題に取り組みやすい環境をつくるため、課題と若者をつなぐ地域コーディネーターの育成と連携体制の構築、若者主体のボランティア活動の見える化を推進する。2016年度は、Gakuvo 東北を中心に、活動している団体・個人が相互に参加でき自らの活動に活かせる環境づくりを通じて、より広範囲の若者が主体的・継続的に活動できるきっかけを提供する。また、大学でのカリキュラム化の動きを支援するとともに、若者の活躍を促す地域コーディネーター・メンターの発掘・育成・連携を促進し、活動の発展と新たな活動が起きやすくなるよう促す。

■事業目標

H28年度は、引き続き Gakuvo 東北学生チームの活動を支援し、既存の団体などが連携して社会貢献活動を体験できる場を地域の若者に提供する。また大学でのカリキュラム運用が正式に始まり、社会貢献活動を実施する動きが強まることから、カリキュラム運用のサポートや若者を支える地域コーディネーター育成などを連携して行い、より多くの若者が活動に参加しやすくなる環境整備を図る。

1. Gakuvo 東北学生チームの運営支援

- (1) 活動する団体や個人のハブとなるよう機能強化を図る。
- (2) 他団体の情報収集と発信、研修会など自主企画の定期的な運営を目指す。

2. 社会貢献活動を体験できる場と環境の創出

15以上の団体と協働し、年間30件、参加者のべ1,300名のイベント・ボランティアツアーの開催を支援する。

3. 若者が社会に挑戦し続けるための支援体制の構築

研修会・講座（受講団体・個人延べ60）を通じて、主体的に活動する若者・団体を育成し、主体的に活動を行う学生数を各活動で30%向上させる。

4. 課題と若者をつなぐ環境整備

- (1) 3つ以上の大学・中間支援組織と協働し、ボランティアやフィールドワークのカリキュラム・評価手法を運用・検証する。
- (2) 東北全体で20名規模の地域コーディネーター・メンターを育成する。

■事業内容

事業目標の実現に向け、「Gakuvo 東北学生チームの運営支援」、「社会貢献活動を体験できる場と環境の創出」、「若者が社会に挑戦しつづけるための支援体制の構築」、「課題と若者をつなぎ、活動する若者を地域で支える環境整備」の4つの事業を実施した。なお、全事

業を通して、実施内容については『5. イベント等、実施内容の報告』にて詳細を記述する。

1. Gakuvo 東北学生チームの運営支援

(1) 学生チームを含めた定期的会議（隔週程度）、個人への定期的振り返り（月 1 回程度）

当初は、昨年度後半に活動休止になってしまった Gakuvo 東北学生チームを再組成したうえで、毎週 1 回程度、学生チームの定期的な会議を実施するとともに、各個人にも定期的な振り返りの機会を設けることを想定していた。

Gakuvo 東北の機能を担う学生インターンについては、10 月から半年間、1 名の学生が後述する「東北 1000 プロジェクト」の運営に参画した。これ以外の学生インターンの採用ができなかったため、「チーム」として組成することはできなかったが、毎週 1 回進捗確認の場を設けたほか、自身の活動を振り返る機会も、進捗確認の場と合わせて定期的実施した。

(2) 40 のボランティア団体との関係構築、情報収集・発信

主に下記 3 つの機会を用いて、合計 40 団体との関係構築、情報収集・発信を行った。

- (1) 団体への取材・WEB による情報発信（東北 1000 プロジェクト）
- (2) 大規模イベントによる、合同での活動紹介・情報発信（東北学生合同新歓）
- (3) 弊団体で受け入れた短期インターンプログラムによる、団体への取材・成果発表イベントの実施

(3) チームメンバーに向けた研修会の企画・運営の支援、実施(各月 1 回程度)

上記の通り、Gakuvo 東北の運営に参加する学生が 1 名にとどまったため、チームメンバー向けの研修会として独自に実施することはせず、本事業で学生向けに実施したイベントに多く参加を促すことで、必要なスキルや観点の習得を行えるよう配慮した。

また、研修会実施時にインターン生の意見を聞いて内容を検討したり、インターン生自身が自らの活動を発表する機会を設けたりするなど、実施プログラムがインターン生自身の主体性の涵養やスキルアップに資するものとなるよう配慮した。

(4) 事務的業務のサポート（活動拠点の確保や各種手続き等）

弊団体が事務所として入居しているシェアオフィス「ファイブブリッジ」の会議室や弊社事務所を中心に、活動に取り組む学生の活動場所の確保や必要な手続き面での支援を継続的に行った。

2. 社会貢献活動を体験できる場と環境の創出

- (1) 学生団体の合同説明会や活動表彰等を学生団体等と協働開催(3 回程度、延べ 600 名)、団体間の連携を促し継続的にボランティアが体験できる場を創出(30 回程度、延べ 450 名) 年 3 回程度の開催を予定していた合同説明会・アワードの実施等に関しては、2016 年 4 月

の合同新歓は予定通り実施することができたが、例年秋～年明けごろに開催していた「学生アワード」、年度末に実施していた「卒業トークショー」の2イベントが、実行委員会の不成立により実施できなかった。

年度後半に、学生団体が一堂に会して活動に触れる場を設定できなかった代替策として、2017年4月に再び合同新歓を実施し、新入生を含めた学生に、社会貢献活動に触れる場を提供した。

一方で、団体間の協働を促しての新たなプログラム実施に関しては、「ボランティア活動」を被災地などの現場で行う奉仕活動、という狭義にとらえることなく、広く「自発的に（金銭や単位などの対価を求めず）、地域・社会（の課題）に主体的に（意思をもって）関わる活動」ととらえることで、従来のいわゆる「ボランティア団体」に限らず、幅広い団体の参画による協働を想定していたが、実際に団体同士が協働するという具体的な動きには繋げることができなかった。原因としては、実施主体と想定していた Gakuvo 東北学生チームが、チームとしては再組成できず、団体同士のハブになる機能を果たせなかったこと、加えて団体同士から、明確な目的意識をもった連携の機運がなかなか出てこなかった（この観点については「4. 事業の課題点、次年度の展望」で詳述する）ことが挙げられる。ワカつくと各団体が連携してのプログラム実施は、企画のフィードバックや資金面でのサポートという形で、2団体と連携して実施したが、それ以外の取り組みは単独での実施となった。また、企画内容としても、現場で実際に奉仕活動に従事するものよりも、活動やフィールドを知る、もしくはワークショップを通じて地域との関わりについて考える、といったものが中心となった。

(2) ボランティアセミナーやフィールドワーク等、未経験者向け体験の場を大学等と協働実施(10回程度、延べ250名)

ボランティアセミナーやフィールドワーク等を大学と協働実施することを目指していた。主に東北大学の主催する機会に参画したり、地域の NPO と連携したりする形で、学生に活動紹介・体験の場を形成したが、Gakuvo 東北学生チームがハブになって実施を想定していた部分は、上記と同様の理由により、実施ができなかった。

3. 若者が社会に挑戦しつづけるための支援体制の構築

(1) 団体の活動理念・方針を明文化するための講座(2回程度)

当初の目標では、Gakuvo 本体で実施されている「V-1」と連動して、2回程度講座を実施し、各団体が具体的な情報発信に取り組んでいく中で活動理念・方針を明文化できるよう取り組みを行う想定だったが、新規で企画の立案・調整を行うことが難しかったほか、団体とのコミュニケーションの中で、直接的にこのような講座へのニーズが低く、そのまま実施しても集客などの面で困難が予想されることから、講座群としては実施することができなかった。

単独の講座としては実施しなかったが、ほかに実施した研修会の中に、要素を盛り込むことで、各団体の活動の中で、活動理念や方針を明確化して進んでいけるような気づきを促すことができた。

(2) 団体のリーダー・新しく活動を立ち上げたい個人などに向けた研修会（各 6 回程度）

当初の目標では、各団体のリーダーなど既に活動している団体向け、また新しく活動を立ち上げたい・始めたい個人への研修会をそれぞれ実施することで、若者が社会に挑戦し続けるための下支えをすることを目指していた。

各団体のリーダー向けというターゲットは、既につながりがあるなど、顔の見えている関係になっていることが多く、テーマ設定なども彼らのニーズを拾う形で進めることができた。一方、新しく活動を立ち上げたい個人については、結果的にどこかの団体に既に属していてリーダー的に活動している学生が多く、参加する学生層が重複していた。特定の団体向けに特化した研修と、複数の団体が集まって集合で行う研修を分けて行うことで、それぞれのニーズに対応して実施することができ、既に活動している学生の思考の深化やさらなる行動への促しにつなげることができたと考える。

定期的なイベント開催、とりわけ特定の団体を対象としない（参加者を広く募って行う）研修などのイベントについては、企画から集客・実施などのコストが高くなるため、例年他の項目よりも困難な点が多く、それは今年度も例外ではなかった。各団体と関係性を築いていく中で、リピートで参加してくれる団体をいくつか確保することができたが、誰を受益者と想定して事業を行うべきか、といった点は、今後再考が必要な点である。この点に関しては「4. 事業の課題点、次年度の展望」でも詳述する。

(3) 活動を体験した若者の振り返りを兼ねた研修会、高校生を含めた下級生に伝えるセミナー等の実施（5 回程度）

今年度も昨年度に引き続き、認定特定非営利活動法人カタリバからノウハウ移転を受けたプログラムをもとに、高校でのプログラムを開催した。宮城県内の中学校・高校で 4 回、また岩手県・山形県内の高校でも各 1 回、開催することができ、のべ 230 名以上の学生の研修や現場へ参加を促すことができた（受講中学・高校生約 900 名）。本年度は中学校での開催、定時制高校での開催など初めてのケースも多く、研修の実施も含めて未知数な点が多かったが、無事すべての回を事故なく終えることができた。

4. 課題と若者をつなぎ、活動する若者を地域で支える環境整備

(1) 大学でのカリキュラムの運用サポートと高度化

昨年度より継続して、ボランティアやフィールドワークといった学生の主体的な学びを促す活動を、正課としてカリキュラム化したり、そのために必要な評価手法の開発を行ったりしている。今年度も、東北学院大などでのカリキュラム化、授業での実践を行うと

もに、多大学連携の枠組みに基づいて、東北学院大での実践を他大学でも展開するための準備などを行った。東北大学でも、弊団体のコーディネートののもと、学生が地域と触れる、フィールドワークを通じて地域の課題に触れるプログラムが授業として実装されている。

(2) 地域コーディネーター養成講座の共同開催（4 回程度）

地域で課題発見・解決を主導できる担い手を広く育成するため、地域コーディネーター養成講座を大学などの連携機関との共催で実施することを想定していたが、連携機関との実施は、岩手県立大を幹事校とし、弊団体も運営団体として参画している機関の実施イベントへの協力 1 回にとどまった。県内の大学コンソーシアムとの取り組みは、起案・調整が難航して行えず、代わりに単独でコーディネーター養成のための勉強会を開催したほか、東京で実施されているコーディネーター向けの研修機会への派遣を行い、コーディネーターの育成機会を担保した。

(3) 地域課題の可視化に向けた調査

短期インターン生を活用した、地域で活動する団体の活動状況や課題の調査、熊本地震や岩手県での豪雨など、今年度発生した自然災害において、被害状況や学生ボランティア派遣の可能性を探る現地視察などを実施した。広く平時における課題と災害時における課題、それぞれの課題に対して、どのフェーズにおいて学生ボランティア活動や、既存の学生団体の活動が果たしうる役割の可視化という 3 点において、必要な環境整備を行った。また、学生団体の課題として挙げやすい広報・情報発信といったテーマ、そしてコーディネーター養成という観点から、各団体や個人が自らの課題を学び、解決していけるような必要なカリキュラム・プログラムの開発も実施した。

(4) 学生の主体的な活躍を促すメンターの発掘（10 名程度）

何をもち「メンター」とするかとの定義を明示しないまま事業を進めてしまったため、現時点で誰がメンターか、という人数・リストは明確にできていない。ただ、研修やイベントの開催にあたっては、すべてを自前で行うだけでなく、社会人を中心とした講師を依頼して実施するよう心掛けたことで、年間を通じて 50 名以上の方にご協力をいただいた。また、その場限りの関わりになるのではなく、その後も継続的に学生支援に関わってもらうよう働きかけた。仙台市と共同で実施した「仙台ミラソン」の取り組みで、市職員が業務の範囲を大きく超えて活動に参画したり、青年会議所の方にフィードバックをいただいたりするなど、これまで活動に関わりのなかった社会人とのつながりも新たに 10 名程度開拓された。今後は、コーディネーターが属人的に行っていたメンター候補者との関係性づくりを共有・リスト化し、より事業全体で活用していく仕組みが必要である。

3. 事業成果

『2. 事業概要』で掲げた目標に対する事業成果の達成状況を下記表に記載する。

事業目標	成果
1. Gakuvo 東北学生チームの運営支援	
活動する団体や個人のハブとなるよう機能強化を図る。	Gakuvo 東北の運営を担うインターン生として、1名の学生が参画し、活動を行った。 団体間のハブとしては機能し始めているが、属人的な部分が強く、継続性に課題が残っている。
他団体の情報収集と発信、研修会など自主企画の定期的な運営を目指す。	40 団体の情報収集・発信を行った。 団体情報の発信サイト「東北 1000 プロジェクト」の運営や、交流・研修イベント「学都ビラキ」を定期的実施しているが、学生主体での実施にはできていない。
2. 社会貢献活動を体験できる場と環境の創出	
15以上の団体と協働し、年間30件、参加者のべ1,300名のイベント・ボランティアツアーの開催を支援する。	実施したイベントやボランティア企画などを通じて、延べ1,262名の学生へ、社会貢献活動に触れたり、地域との関わり方を知ったりする機会を提供した。全イベントを通じて、40以上の団体に参画いただいたが、企画・運営などで直接協働したのは、2団体にとどまった。
3. 若者が社会に挑戦し続けるための支援体制の構築	
研修会・講座（受講団体・個人延べ60）を通じて、主体的に活動する若者・団体を育成し、主体的に活動を行う学生数を各活動で30%向上させる。	各種研修メニューを通じて、団体・活動のリーダー層延べ195名（団体所属者の所属団体数は延べ36）に対してノウハウ提供やメンタリングを行った。 主体的に活動を行う学生数の変化については、対象の前後とする期間、「主体的な活動」の定義やデータの収集方法が詰めきれず、未検証である。
	「カタリバ」プログラムのノウハウ移転を受け、高校へのプログラムの実施など、延べ237名の学生がボランティアスタッフとして参加した。
4. 課題と若者をつなぐ環境整備	
3つ以上の大学・中間支援組織と協働し、ボランティアやフィールドワークのカリキュラム・評価手法を運用・検証する。	2大学（東北大、東北学院大）で実際の授業での実践を行った。また県内12大学の連携枠組みで、カリキュラム策定や評価手法の開発などを実施した。

<p>東北全体で 20 名規模の地域コーディネーター・メンターを育成する。</p>	<p>延べ 50 名ほどの社会人に活動に参画いただいたが、コーディネーター・メンターとしての関わり方・役割をこちらから明示できていなかったため、実際にそれらの役割を果たしていただいた方は数名にとどまった。</p>
---	--

【事業実施によって得られた成果】

すべての活動を通じて、延べ約 1,700 名の学生への支援、活動のキッカケを提供した。

(うち、運営側または主体者として参加した学生は 200 名以上)

継続して実施している取り組みの割合が高まってきたこともあり、これまでの動きから生まれた取り組みで活躍する先輩の姿や、既存の団体の活動の様子を見て、自分も挑戦したい、新しい取り組みをしてみたい、と新しい団体・活動を創り出す後輩ができる、という実例が複数生まれている。そういった新しい動きを、「学都ビラキ」や「東北 1000 プロジェクト」といった取り組みを通じて他の学生に周知する、存在を広めていく、といったサイクルをつくることができるようになっている。

これも単年度の取り組みの成果ではないが、ひとつひとつの取り組みの認知度が少しずつ上がってきたことで、より深い協働のステージに進める関係性ができ始めているのもそのひとつであろう。今年度目に見えて起こったこととしては、たとえば地域課題の見える化・解決の活動を大学の正課（東北大・東北学院大の授業）で取り組み始めることができたことがあるが、これもこの 1 年だけでなされたことではなく、過去数年の蓄積の中で培われた信頼関係によるものが大きい。

【成功したこととその要因】

「学都ビラキ」など、団体同士が同じ課題に考え、取り組むこと、お互いの悩みや相談を開示し合い、共に進んでいこうとする動きを定期的に仕掛けることができた。どうしても単発の取り組みになりやすく、年間を通じた継続的なサイクルの構築はこれまでもなかなか実現できていなかった部分だったが、事業を担当するスタッフの役割分担の見直しによって、一人当たりにかかる事業の負荷が下がったことで、企画を考え、段取りを行い、実行するという基本的サイクルでつまづくことが減り、継続性を担保することができた。

同様に、取り組み同士のつながり、継続性を意識しながらの事業実施がしやすくなったことで、ポータルサイトとしての「東北 1000 プロジェクト」の整備とその活動にあたる学生メンバーの確保、リアルな場としての「学都ビラキ」の開催といった、一連の施策が紐づいて全体として活動の見える化、共有につながっていく流れを再構築することができた。

【失敗したこととその要因】

イベント数など、全体的に実施している取り組みの総量が大きいこともあり、目に見え

やすいイベントの実施・集客といった数値が目標管理の中心になってしまったことで、主体的に活動している学生数の変化や、メンターとして育成できた人数など、目標に掲げていながら定量的な定義づけや効果測定がおろそかになってしまった。

また、団体間の協働を促すという役割もほとんど果たすことができなかった。団体同士の直接的なハブの存在を担うのは、立場が近く相談しやすい学生自身が担うのが理想的であり、またこの取り組みそのものを学生主体で実施できるようにしていきたいという思いから、取り組みの主な部分を学生が担うことを想定して計画したが、Gakuvo 東北の運営に関わる学生メンバーを十分確保できなかった。そのため、各団体との個別の情報発信・関係構築はなんとか実施することができたが、そこから団体同士の橋渡しをするというところの取り組みが停滞してしまった。この活動そのものが、より学生にとって魅力的に見えるよう見せ方を工夫する、もしくは取り組みを担う学生を集める、という変数を考慮してより現実的な事業計画を組む必要があった。

4. 今後に向けての課題点、展望

本年度は、約 1,700 名の学生に活動のキッカケとなる場を提供することができた。継続的に行う取り組みが着実に積み重ねられていることに加え、オンラインとリアルイベント、そこに紐づく人のネットワーク（運営に関わる学生メンバー、関わる社会人など）の再構築・整理が進んでおり、長期的な視座に基づいた取り組みを今年度も進められたことは、継続して本事業を推進してきた成果であるといえる。

一方で、今年度は学生主体でこれまで続けてきた学生アワード、卒業生トークショーといった大規模イベントが、実行委員の組成失敗により実施できないなど、学生の入れ替わりに伴う課題が表面化した 1 年でもあった。実施したいという声は散発的に上がりながらも、リーダーシップをとってイベントを推進させていこうという動きがみられず、実際の実施までこぎつけるまでに至らなかった。

ここから次年度以降への課題として改めて取り組まなければいけない点が、主に 2 点考えられる。ひとつは「連携」「協働」のあり方をどうとらえるか、という点である。

「連携・横のつながりが必要」という声は毎年複数の学生の声から上がり、実際にそれに基づいた行動が試行されるという流れは例年起きているが、それが継続的な動きとして定着化することは少ない。「学生団体同士で連携する、横のつながりをつくるイベント・取り組みをしたい」という学生と少なからず接して得られた知見として、「連携した先にあること・目的」が明確でない場合が多いことが挙げられる。「連携したほうが何かよさそう」という考えからスタートすることはひとつのきっかけとしては重要だが、その先にどのような成果を求めると、さらには連携しようとする団体自身が、その連携にどのような目的をもって取り組むかを明確にしないと、連携した先の成果は得られにくい。

なかなか団体メンバーだけでは考えづらい「団体の理念や活動方針」など、なぜそもそも連携したいのかなど、団体の核となる部分の思考を深める機会は、今年度の「学都ビラキ」でも試行した点ではあったが、今後さらに深めていくべき部分であると考えられる。

もうひとつは「学生主体」で実施することに、中間支援組織・コーディネーターとなる人間（社会人）がどのように関わるか、という点である。今年度実施できなかったイベントに関しても、「実施する」ということを最大の目的とするならば、学生の実行委員組成を待たずとも、弊団体が主導してイベントを開催する、あるいは団体の代表を経験した上級生などに働きかけて実施することそのものは不可能ではなかつたであろうし、それによって生まれた機会なども一定あったであろう。ただ、本事業の根底にあるのは「学生の主体性に基づく活動を支援する」ことである。学生の「やりたい」という意欲に基づかないまま実施をしてしまう、あるいは上級生が言うことだから、というヒエラルキー構造の中で実施してしまうことは、かえって彼らの主体性を下げ、依存体質を生み出してしまふ。そしてなにより 1 回は実施することができても、決して継続的な取り組みにはならない。この考えから、最終的には実施の有無も含めて、「（現在活動の中核を担っている世代の）学生

の動きに委ねる」という基本姿勢は変えずに本事業を進めた。直接こちらで巻き取るまでいかずとも、漠然とした「やりたい」という意思表示にどのように向き合うか（実際に行動することによる困難を受け止めないまま、ただ単に「やりたい」という想いだけに向き合ってしまうことも、取り組みの成功や継続性を担保するうえでは好ましくないと考えられる）という点は、今後この取り組みが継続的になり、学生を中心に自走していくことまでを視野に入れると、より踏み込んで考えていくべき点であるといえる。

一方で、今年度は「学都ビラキ」や「東北 1000 プロジェクト」といった、今後活動や団体の見える化の核となる取り組みを、一部運営を学生に委ねながらも、社会人スタッフ中心に進めてきた。こういった、学生側から顕在的にニーズとして挙がってこないが施策として重要であると考えられる取り組みは、社会人スタッフ中心にまずはスタートしながらも、徐々に学生にも取り組みに参画していってもらい、活動の主体を移していくというプロセスが有効であるとする。その際、活動には参加したことはあるが特定の団体には所属していないなど、学生の中でも団体の取り組みを第三者的な目線で見ることができる人の参画を促すといった点も必要であろう。

昨年度の報告書に記載した、スタディツアーなど「体験・実践する」活動の一手前、「知る」活動への回帰は今年度も続いた。しかし新しい傾向として、被災地域以外をフィールドとする活動と、その入り口における「知る」活動も多く見られるようになってきている。外部の動きでも、東北大学が 2012 年以来継続していた「東日本大震災学生ボランティア支援室」を廃止し、震災以外のボランティアにも焦点をあてた「課外・ボランティア活動支援センター」に改組したことなど、東北というフィールドであっても、被災地に限定されないボランティア、地域活動のあり方が、より強く出始めているといえるだろう。同様に、地域・地域課題との関わり方、社会活動への関わり方の多様化も一層進んでおり、より「若者が主体的に参画する」ためにどのような活動のあり方が求められるかも引き続き絶えず見直していく必要がある。

震災から 6 年が経過し、大学に入学してくる学生も、地域活動との最初の接点が、応急・復旧期の震災ボランティアに限らないケースが増加してきた。全国各地・東北各地から学生が集まる仙台という環境において、ニーズの多様性、そしてますます複雑化していく課題に対応した施策がますます必要になってくる。裾野を広げていくためには、初心者向けのボランティアの入り口（スタディツアーやワークキャンプ）を多く開催する大学などとの連携もさらに重要になってくるだろうし、動き始めた個人・団体が、失速せずに活動を発展させていくためには、側面から活動を支援するメンターのネットワークを構築していく動きも加速していく必要がある。一方で、代替わりを繰り返し、そのままにすれば年々「想い」「原体験」が薄れていく学生というコミュニティにあって、ただ取り組みを「継続する」だけでも、きめ細かいフォローが必要になっていくし、場合によっては我々自らが現場・企画をつくり、サンプルを見せていくということも必要になってくるだろう。

予算など使えるリソースも限られてくる中ではあるが、「次の担い手を育てていく」主体

へ転換していくという団体としての大きな方向性を踏まえながらも、直接担い手を増やしていく活動の比重も維持しつつ、今後も活動を続けていく。

5. イベント等、実施内容の報告

2. で記載した事業概要で行った具体的な取り組みについて記述する。

1. GAKUVO 東北学生チームの運営支援

(1) 学生チームを含めた定期的会議、個人への定期的振り返り

■Gakuvo 東北インターン生のミーティング・個別相談実施

10月にGakuvo 東北インターン生が正式に参画して以降、週1回定期的に進捗確認のミーティングを実施した。

実施日は基本的に曜日固定で、インターン生の活動日に合わせて対面で実施した。就職活動などの都合で一部変則的になった日もあったが、ほぼ頻度を崩すことなく定期的に実施することができた。

主な議題としては、直接の担当である「東北 1000 プロジェクト」WEBサイトの更新計画や内容を中心に、イベント類（「学都ビラキ」など）の内容や広報、自身の活動の後継者を見つけるために、どう活動を発信するか、などであった。

また、週1回のミーティングと並行して、自身の活動の振り返りをする機会も定期的に設けた。主にミーティング内で合わせて行う形をとっていたが、自身が書いた記事やイベントの振り返りなど、行ってきた活動の振り返りを行うとともに、今後に向けての改善点は何か、どんな点を注力していくべきかを、自分の頭で考えて実施することができるようフォローを行った。

(2) 40 のボランティア団体との関係構築、情報収集・発信

■「東北 1000 プロジェクト」による情報発信

WEBサイト「東北 1000 プロジェクト」（サイト上の表記は「1000 プロ」、<http://www.tohoku1000.jp>）を活用して情報発信を行った。団体の基本情報を掲載したり、インターン生の取材・執筆による団体紹介を通じて読者に活動への理解を深めてもらったりするなど、団体や活動のポータルサイト的な位置づけをもたせて運用を行った。

■大規模イベントによる、合同での活動紹介・情報発信

後述する「東北学生合同新歓」など、複数の学生団体が合同で行うイベントにおいても、活動紹介・情報発信の機会を設けた。こちらの機会においても、実際に活動を行っている学生自らが、自身の表現で自らの活動の魅力伝えることで、こういった活動に関心がある学生への直接的な訴求につながった。

■弊社で受け入れた短期インターンプログラムによる、団体への取材・成果発表イベン



トの実施

夏休み中の 8 月、8 日間～1 か月間という日程で、短期インターン生 4 名（明治学院大、東北学院大、仙台白百合女子大）を受け入れ、仙台で活動する学生団体のヒアリング、基礎調査を実施してその成果を発表するイベントを行った（イベントの内容は後述）。

インターン期間を通じて、17 の団体に取材・ヒアリングを行うことができ、普段各団体での活動を行っていると感じづらい、各団体の共通点や比較といった観点で、団体の情報発信を行うことができた。

上記の活動を中心に、本事業を通じて、延べ 40 団体との関係構築・情報発信を行った。アイセック仙台委員会、IVY youth、あぐりどんと祭実行委員会、Avain、E-zemi、IF I AM、岩手わかすゼミ in 仙台、ALL 東北教育フェスタ、学魂祭実行委員会、学生による地域活動支援団体『みまもり隊』、COLORweb 学生編集部、キッズドア、good!、Growing Class、STUDY FOR TWO、スタ☆ふくプロジェクト、TABIPPO 東北、地域活性団体なないろプロジェクト、チャリティーサンタ仙台支部、Chance for Children、Table for Two Miyagi University、TEDIC、東北女子学生コミュニティ epi、東北大学インクストーンズ、東北大学国際ボランティア団体 As One、東北大学生による高校生支援団体 bridge、東北大学地域復興プロジェクト“HARU”、東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室「SCRUM」、東北大学留学生協会（TUFSA）、東北若者 10000 人会議、ドットジェイピー宮城支部、ピコせんサポーター、hirovel 弘前×仙台、復興応援団、みなとの街 100km 徒歩の旅、宮城県青年赤十字奉仕団、宮城大学学生団体 One Second Project、宮城・山形カタリバ、みんなの夢 AWARD、もりまち CoAL

(3) チームメンバーに向けた研修会の企画・運営の支援、実施

■ 「学都ビラキ」に向けたプレゼンテーション研修

2. 事業概要「事業内容」内に記載の通り、Gakuvo 東北の運営に参加する学生が 1 名にとどまったため、チームメンバー向けの研修会として独自に実施することはせず、本事業で学生向けに実施したイベントなどの機会を通じて、必要なスキルや観点の習得を行えるよう配慮するなどした。一例として、「学都ビラキ」内での取り組みを挙げる。

3 月 24 日に開催した「学都ビラキ」では、活動報告のプレゼンテーションを実施した。自身の活動を限られた時間の中でわかりやすく発表することを目標に、発表内容へのフィードバックや、伝え方・論理構成のレクチャーなどを発表前に行った。



(4) 事務的業務のサポート（活動拠点の確保や各種手続き等）

主に下記のような点で、活動サポートを実施していた。

- ・活動拠点（ファイブブリッジ会議室）の整備（ミーティング時の会議室予約など）
- ・イベント実施時などの物品サポート
- ・活動支援先団体への取次、支援内容の説明（金銭面での留意事項など）

2. 社会貢献活動を体験できる場と環境の創出

(1) 学生団体の合同説明会や活動表彰等を学生団体等と協働開催、団体間の連携を促し継続的にボランティアが体験できる場を創出

学生団体と連携して実施したイベント（東北学生合同新歓）や、実際に活動している団体と協働で地域課題を知ることができるワークショップなどを中心に行った。行った取り組みについては以下の通りである。

■東北学生合同新歓 2016

【実施概要】

○日時：2016年4月29日（金・祝）13:00～18:00

○会場：仙台国際センター 展示棟1

○参加者数：学生 278名

○出展団体（順不同）：

・第一部参加団体

東北大学地域復興プロジェクト”HARU”、IF I AM、みんなの夢 AWARD 東北支部、Growing Class、東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室学生チーム”SCRUM”、一般社団法人復興応援団、NPO 法人ドットジェイピー宮城支部、アイセック仙台委員会、NPO 法人チャリティーサントラ、東北若者 10000 人会議、とんぺー高校生支援団体 bridge、スタ☆ふくプロジェクト、公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン、STUDY FOR TWO 宮城学院女子大支部、NPO ピコせんサポーター、COLOR web 学生編集部、宮城カタリバ/山形カタリバ、東北大学国際ボランティア団体 As One、MAKOTO インターン、みなとのまち 100km 徒歩の旅、あぐりどんと祭実行委員会、NPO 法人 good!、E-zemi、東北女子学生コミュニティ epi、ナレッジコミュニティ東北、定禅寺ストリートジャズフェスティバル実行委員会、第二回学魂祭実行委員会、NPO 法人 TEDIC、学生による地域支援活動団体 みまもり隊、IVYyouth、メルカリ（全 30 団体）

・第二部参加団体（ステージ発表団体）

東北女子学生コミュニティ epi、TUFSA（東北大学留学生協会）、青葉祭り実行委員会、定禅寺ストリートジャズフェスティバル実行委員会、光のページェント学生実行委員会、楽天イーグルス学生インターン「E-キャンパス」、仙台・青葉祭り（映像のみ）（全 7 団体）

【企画目的】

- ・この春仙台に来た学生に当イベントでの様々な出会いを通してこれからの活動に生かしてもらおう。（新入生向け）
- ・学生団体同士、一般参加者同士が交流し、活動を起こす上での仲間の獲得を目指す。（参加団体向け）
- ・自分に合った学生団体やイベント実行委員を見つけこれからの人生を大きく変えるよう

な出合いをしてもらおう。

- ・宮城にいる学生に新しいライフスタイルを提案する。

【実施プログラム】

- 12:30 開場
- 13:00 オープニング
- 13:30 一分間団体紹介
- 14:00 (第1部)各団体ブース説明会
- 15:00 epi ファッションショー・あねっこ東北
- 15:30 (第2部)仙台でのイベント紹介
- 16:30 イベント終了

【実施内容】

まず初めにオープニングとして、各団体による1分間の団体紹介を行った。その後、ブース説明会として、参加者が各ブースを自由に回れる時間を設け、参加者と出展団体の交流を図った。ブース説明会は特に時間制限などは設けず、各自が好きな団体と自由に話せる場とした。また、ブース説明会の合間などにも、適宜団体紹介を挟むなど、より各個人の交流が促進されるよう工夫した。

第1部と第2部の転換の時間には、前年度も実施した東北女子学生コミュニティ epi のファッションショーや、東北の学生によって構成されているアイドルグループ「あねっこ東北」のライブを行うなどして、参加者が飽きないよう工夫した。

第2部では、仙台で行われているお祭りや行事などに関わっている学生がステージでプレゼンテーションを行い、大学生活を充実させるために活用できる機会をより多面的に知れるようにした。

【参加者からの声】

- ・みなさん親切で話しやすかった。
- ・イベントを当日知ったためイベント自体の情報をもっと発信してほしい。
- ・今後も是非続けてください。
- ・来年もこのイベントを企画してほしい。

【まとめ】

今回のイベントは昨年度から引き続き、5回目の開催となった。

昨年度は500名近い参加者を集めることができたが、今年は300名足らずとなった。大きな理由としては、実行委員の組成・準備が遅れ、入学式でのピラマキなど必要な施策が去年より行いきれなかったこと、昨年参加した大規模団体で今年は不参加だったところが

いくつかあり、広報の動きが鈍ったことなどが原因として挙げられる。

動き出しの遅さは会場確保にも影響があり、今年は例年使っていた他の会場（AER、メディアテーク）より高額な国際センターを確保せざるを得ず、また日程もGWに入った4月29日と昨年よりさらに遅れることになった。

一方で、出展団体の確保には今年も苦戦することなく、昨年並みの30団体が参加した。団体の入れ替わりもあり最近活動を始めた勢いのある団体などの参加もあった。団体に所属する上級生同士の交流も多数みられ、新たなつながりが多く生まれる場になった。



■東北学生合同新歓2017

【実施概要】

○日時：2016年4月16日（日）13:00～18:00

○会場：仙台市中小企業活性化センター 多目的ホール

○参加者数：学生221名

○出展団体（順不同）：

アイセック仙台委員会、IVY youth、あぐりどんと祭実行委員会、IF I AM、岩手わかすゼミ in 仙台、東北大学インクストーンズ、ALL 東北教育フェスタ、学生団体hirovel 弘前×仙台、Table For Two Miyagi University、東北大学地域復興プロジェクト“HARU”、東北大学留学生協会、東北若者10000人会議、学魂祭実行委員会、COLORweb 学生編集部、特定非営利活動法人キッズドア、Growing Class、国際協力団体夢追人、As One、Shake F Heart、STUDY FOR TWO 東北地区、TABIPPO 東北、NPO 法人ドットジェイピー宮城支部、NPO ピコせんサポーター、一般社団法人復興応援団、みなとのまち100km 徒歩の旅、地域活性団体なないろプロジェクト、宮城県青年赤十字奉仕団、宮城カタリバ/山形カタリバ、みんなの夢AWARD8 学生事務局、一般社団法人ワカック（いぐるみ仙台、東北1000プロジェクト）

【企画目的】

- ・東北で何か新しいことに挑戦したい、学生生活を充実させたいと思っている学生に出会いを提供し、「やりたいこと」を見つけてもらう。
- ・学生団体の横のつながりをつくり、互いに高め合うことで東北を盛り上げる。

【実施プログラム】

12:30 第1部開場

13:00~15:00 第1部（団体プレゼンテーション、ブース）

15:30 第2部開場

16:00~18:00 第2部（団体プレゼンテーション、ブース）

18:00 終了

【実施内容】

第1部と第2部と全体を2つのブロックに分け、それぞれで同じ内容を行うことで、途中からでも参加がしやすいよう工夫した。

それぞれの部では、参加団体と自由にブースで交流できる時間を時間中通しで展開すると同時に、会場中央部に設けたプレゼンテーションエリアでは、各団体の2分半プレゼンテーションや、実行委員による東北にまつわるクイズコーナーなどをブースと並行して実施した。

【参加者からの声】

- ・ボランティアをやってみたいという私の希望に合う団体が見つかった。
- ・他大学との先輩との交流ができ、視野が広がった。
- ・多くの団体の説明を聞いて良かった。

【まとめ】

昨年に続き、参加者数は対昨年比で減少する結果となった。実行委員の本格的な稼働が3月までずれ込み、広報や参加団体の募集など最低限のオペレーションは実行できたものの、出展団体を巻き込んだ集客活動などは一部の協力的な団体の自主的な動きにほぼ頼らざるを得ず、大々的な動きがあまりできなかったのが原因と考えられる。

内容に関しては、途中入退場がしやすい構成にできるよう、2部構成にしたほか、団体のプレゼンタイムとブース出展以外のコンテンツをほぼ行わず、極めてシンプルな構成となった。全体参加者の中での途中参加者の割合を計測していないため、冒頭からは行けなが興味があるという参加者の来場促進にどの程度つながったかの判断は難しいが、例年と比べて途中参加者の割合はそこまで多くなかったことをふまえると、途中からでも参加しやすいというメリットはそこまで周知しきれていなかったと考えられる。

また、今回は団体プレゼンの箇所を会場中央に設けたほか、団体プレゼンとブースを平行して行ったが、一部会場導線や参加者の動きが制約される場面もみられた。

参加者数はここ数年で最少となったが、その分出展者同士が自主的に交流する場面が多くみられ、上級生の交流は例年以上に活発になされたのではないだろうか。



■いぐるテラス

【開催概要】

○日時・ゲスト・参加者数：

日時	ゲスト	参加者数
2016年7月26日(木)※1	(株)アクセル・モード 倉光周平さん、鈴木淳一さん	2名
2016年10月13日(木)	HMK デザイン 三浦博文さん	5名
2016年12月8日(木)	(株)ユーメディア 矢野弘樹さん	3名
2016年12月19日(木)※2	(株)TBA 川瀬三雄さん	2名
2017年1月12日(木)	(株)真壁技研 木立華香さん	5名
2017年1月26日(木)	アンデックス(株) 三嶋順さん	2名
2017年2月9日(木)	(有)佐貞商店 佐藤亘さん	3名
2016年2月23日(木)※3	(株)パステル 平真ゆきこさん	2名
2017年2月23日(木)	(株)あいあーる 岡田脩さん	4名
2017年3月9日(木)	KM International Trading and Consulting 中正宏さん	6名
2017年3月12日(日)※4	東北大学経済学部 高山育実さん 日東イシダ(株) 加納舞さん	22名

*時間は、※2：18:15～19:45、※3：16:30～18:00、※4：14:00～16:00、それ以外はすべて18:30～20:00

*会場は、※1：(株)アクセル・モード会議室、※2：T-Biz 会議室、それ以外はファイブブリッジ創造スタジオ「ごくり」(すべて宮城県仙台市)

【企画目的】

通常の学生生活では出会いにくい社会人と若者とが交流し、仕事や地域活動といった他よな観点から、地域へ関わることの魅力を発見する。地域企業の経営者や若手社会人などを中心にゲストを招へいし、多様な視点から地域で関わることやその魅力について知る機会を創出する。

【実施内容】

毎回ゲスト（若手社会人、経営者）をお招きし、ゲストの大学時代・就職活動の経験、勤めている企業・団体での仕事内容や仕事のやりがい、大変な点、地域で働くことの魅力などをお伺いした。各回後半では質疑応答の時間を多く設け、参加学生の疑問解消や理解が深まるよう配慮した。

【参加者の声】

- ・自分のやりたいことをやる方が、モチベーションが上がり、効率が良くなるので、やりたいことを仕事にできれば幸せと思う。やりたいことに出会えるように色々取り組んでいきたい。
- ・自分は将来何をしたいか、ではなく「どこに対して、何を使って、どう社会貢献する？」を考えたいと思いました。
- ・何才になっても夢を追い続ける人はカッコイイと思った。
そんな人になりたいし、もっと使命感をもって働く人が増えてほしいと思います。

【まとめ】

一昨年度から実施している「いぐするテラス」を、地域への多様な関わり方、とりわけ社会人と学生という目線の違いから見るキャリア観や仕事観、地域との関わり方という観点で本年度も継続的に実施した。

打ち出し方として、社会人との交流イベントではあるが「就活イベント」といった短絡的な見せ方や、業種や職種といった「わかりやすい」情報を提示するということよりは、ゲストの方個人のキャリアや、一面的ではないそれぞれのキャリアの持つ性質、過去から今までの中で多様な「社会」との関わりに焦点をあてることによって、各自のキャリア観や地域との関わり方についての考え方を深める会となるよう工夫した。

ゲストの選定においては、仙台・宮城で特徴的な事業展開、志を持って事業に取り組まれている経営者の方や、地域企業で働かれている若手社会人の方など、普段なかなか接点を持つことがないが、魅力的なお話をしていただけるゲストの方をお呼びできるよう注力した。特に、単純な「働き方」というだけでなく、ワークライフバランスや業務外での地域との関わり、あるいはひとくちに仕事といっても地域との関わりが深い仕事など、どうしても一面的になりがちな「社会人＝働く」というイメージを良い意味で変えうるゲストの方を多くお呼びすることで、学生のうちからできる、かつ卒業後も長く続けられる「地域との関わり」を考えられる会とすることができたのではないだろうか。

ただ一方で、全体的な開催頻度や参加者数に関しては課題が残った。少人数で行うイベントという触れ込みではあったが、開催そのものが危ぶまれるほど直前まで参加申込数が少なかった回もあり、また回によっても大きな差があった。発言者が偏ってしまう回が散見されたり、ゲストのお話と質疑応答の時間バランスも（イベントの性質上やむを得ない

部分もあるが) 回によって大きく異なることもあったりしたこともあり、場のづくり方やゲストとのコミュニケーションといった点で改善すべき点が残された。



■個別面談・相談会

【開催概要】

○実施回数・参加者数：全 12 回開催 16 名参加

○会場：いずれもワカツク事務所（仙台市）

【企画目的】

地域に関わるプログラムへの参加に興味がある学生に向けて、プログラムのしくみやメリット、注意点を理解してもらうとともに、個人の興味を引き出し最適なプログラムへの参加を促すために開催を行った。

【実施内容】

社会に出た際に必要とされる能力などを紹介しながら、大学生活中にもどのような経験をするよいか、各プログラムに参加することでどういった力を得られるのかを説明した。その後、募集中のプログラムのしくみや内容を具体的に説明。その後、個別にこれまでやってきたことやこれからやりたいこと、不安や疑問点などを解消する面談をコーディネーターと行い、今後のアクションを決めていった。

【まとめ】

定例での開催日程を設けず、問い合わせがあった段階で個別に行うという形式をとり、個別に参加者の意向などを聞ける場面を多くとった。

参加者満足度は総じて高く、参加者にとってプログラムへの理解が深まるだけでなく、これまでの学生生活を振り返り自分の将来やこれから学生生活の中でやるべきことについて考えることができる機会となったようだ。

申込に至る導線は様々だったが、特定のプログラムの問い合わせから入った学生でも、なぜそのプログラムに興味を持ったか、その機会を自分が選ぶ理由は何なのか、という考えは深まっていない場合が散見された。そのため、特定のプログラムへの興味・関心があ

る・ないに関わらず、どの参加者への説明においても、広く様々な領域に興味・関心を持つこと、また面談時にも、自身のこれまでや将来についてや、そもそもどんなことに興味・関心があるのか、といったことをより突っ込んで聞いていく、考えてもらうことを心掛けた。実際に何をしたらいいのか、を具体的に考える前に、自分は何に興味があって、そこに近づいていくためにどんなことを身につけるべきか、を自分で考え行動する、というサイクルをつくらなければ、ただ参加するだけで得られることは少ないことは、これまでの学生の傾向を見ても明らかであり、これからプログラムに参加する学生にも、同じ意識を持ってもらうように働きかけた。

■カタリバ体験会・説明会

【開催概要】

○実施回数・参加者数：全 22 回開催 82 名参加

○会場：ファイブリッジ会議室、エルパーク仙台、仙台市市民活動サポートセンター、七北田公園体育館会議室（仙台市）、東北芸術工科大学（山形市）、いわて県民情報交流センター「アイーナ」（盛岡市）

【企画目的】

「カタリ場」のプログラムを実際に体験し、しくみと魅力を理解してもらうことで、学生ボランティアとして参加を促すために開催を行った。

【実施内容】

実際の「カタリ場」で行われるプログラムを疑似体験してもらいながら、「カタリ場」がどのような場であるかを理解してもらった。その後、団体としてのカタリバの理念や目指すもの、東北での活動内容について説明した。

【参加者の感想】

- ・ 純粋に楽しかったです！高校生と一緒にするのが楽しみです。
- ・ 漠然としたイメージしかなかったカタリバがとても魅力的なものであることができた。
- ・ 少し目をそらしていた自分についてまた振り返ることができた。

【まとめ】

単なる説明だけでなく、実際のプログラムを疑似体験してもらう構成をとっていることで、参加者にとってプログラムへの理解が深まるだけでなく、実際の高校企画の現場では高校生が経験する、自分のこれまでやこれからのについて語り合うという体験を大学生が経験できる機会となっている。これまでの学生生活を振り返りながら、改めてこのプログ

ラムに自身が参加する意義を考えることができる機会となっているのではないだろうか。

開催時期に多少ばらつきが生じている（多く開催している時期とほとんど開催できていない時期が存在する）点と、広報のルートが限定的である（WEBでの流入や知り合いからの口コミが大半であり、その他の方法での周知ができていない）点は今後の課題である。



■台風 10 号豪雨災害 宮古ボランティアツアー

【実施概要】

- 日時：2016 年 9 月 13 日（火）～15 日（木）
- 会場：岩手県宮古市
- 参加者数：学生 5 名

【企画目的】

災害ボランティア活動を通じて、地域貢献に資する人材を育成すること。交通網が寸断されている現地への移動手段を確保し、学生ボランティアの派遣を通じて、復旧の一助となること。また、参加学生が現地の状況について SNS 等で発信することで、他の学生にもボランティア活動への興味関心を高めてもらうこと。

【実施プログラム】

- 9 月 13 日 13:00 ワカツク事務所集合、説明会開催
 - 13:30 仙台発
 - 18:00 宮古着
 - 20:00 宿泊施設(遠野)着 ※宮古市内の宿泊施設が確保できなかったため
- 9 月 14 日 7:00 宿泊施設(遠野)発
 - 9:00 ボランティアセンター受付
 - 10:00 ボランティア活動開始 ※正午～13:00 昼休憩
 - 15:00 ボランティア活動終了
 - 16:00 岩泉町の被害状況視察 ※安全確保のため車内から
 - 19:00 宿泊施設(遠野)着
- 9 月 15 日 7:00 宿泊施設(遠野)発

9:00 ボランティアセンター受付
10:00 ボランティア活動開始 ※正午～13:00 昼休憩
15:00 ボランティア活動終了
16:00 宮古発
20:30 仙台着

【実施内容】

学生ボランティアを募集する Web サイトや、仙台市内の各大学のボランティアセンターの協力を得て、参加学生を募集した。大型車両では現地への道を通行できないため、定員は5名までとし、仙台在住の学生を優先した。仙台在住の学生3名と、県外の学生2名（うち1名は仙台出身）が参加した。男子学生1名、女子学生4名と、女子学生の応募が多かった。

現地のボランティアセンターの負担を減らすため、仙台市内で事前にボランティア保険の加入手続きを済ませた。また、宮城県を通じて「災害派遣等従事車両申請書」を提出し、高速道路の無料申請を行った。レンタカーを仙台市内で1台借り、移動用車両とした。

出発当日まで参加学生と顔を合わせられなかったため、集合後はお互いに自己紹介をし、3日間の行程や宿泊先、緊急連絡先などの説明を行った。移動時間が長かったため、休憩を兼ねて途中のホームセンターに立ち寄り、長靴やゴム手袋等を買足した。全員が初対面だったが、夕食をとる頃には打ち解けていた。

2日目は、初めて学生を連れてボランティアセンターに向かい、5人全員が同じグループになるように配慮していただいた。参加者全員で恒例のラジオ体操を行ったあと、1階が浸水した個人宅に派遣された。派遣先までの移動は各自だったため、レンタカーで5人を輸送した。床を磨いて泥を落とすのが主な作業で、一般参加の社会人に混ざって活動した。ほとんどが災害ボランティア活動は初めてだったため、単純な作業で安心したようだった。活動終了後は学生のリクエストを受けて、岩泉町まで足を伸ばした。安全を確保するため車内からの視察だったが、大木が横たわっていたり、住宅が泥だらけのままだったりする光景を見るには十分だった。学生は各々で写真に収め、友人や知人にどう現状を伝えるか意見を交わし、早速 SNS 等で発信していた。

3日目は、被害の大きかった個人宅に派遣された。たんす等の家具の中に泥水が残されたまま何日も経っており、臭いの強い中での作業だった。東日本大震災の直後もボランティア活動に従事していたという方が多いグループだったため、的確な指示を受けながら家財道具を運び出し、適宜休憩を挟むこともできた。途中、資材が足りなくなり、グループのリーダーからの依頼でボランティアセンターと現場を行き来した。前日に比べて力仕事が多く、学生にとってはややハードな印象だったようだが、これが最後の活動ということで5人全員が一生懸命に取り組んでいた。

【参加者からの声】

- ・ ボランティア活動にはずっと参加したいと思っていたが、自分 1 人で行くにはなかなか不安があった。今回の企画のおかげで、不安が取り除かれた状態でボランティア活動に専念できた。
- ・ 今回参加してみて、自然災害の復興にはやはり長い時間とたくさんの人の力が必要だと強く感じた。「私なんかが力になれるのかな」と感じる場所もあったが、少しでも人のためになるのなら、できる限りがんばろうと思うことができた。
- ・ このボランティアを最初で最後にはしたくない。繰り返しこういった活動に取り組んで行こうと考えている。見てきたものを周囲に伝え、「自分も行こう！」と他の人に思ってもらえるような起爆剤のようなものになれば嬉しい。
- ・ ボランティア活動に対する考えが大きく変わった。想像以上に、人と人とのつながりが重要だと気づいた。いろいろな方とお話しでき、人のやさしさにたくさん触れた。

【まとめ】

今回のボランティアツアーは、岩手県と北海道で台風 10 号による甚大な豪雨災害が発生したこと、加えて 6 月まで岩手県在住だったスタッフが入社したことで企画・催行した。

現地の復旧の一助となること、災害ボランティア活動を通じて地域貢献に資する人材を育成することが目的だった。実際に、学生 5 人とスタッフ 1 人がボランティア活動に従事したことや、参加学生のほとんどが初めてのボランティア活動で多くを学び、今後こうした活動に意欲を見せたことから、目的は果たしたと考えられる。

今後は災害等の緊急時はもちろん、平時のボランティア活動についても、積極的な発信に努めたい。



■ ジブンビラキ～熊本地震・台風 10 号を考える～

【実施概要】

- 日時：2016 年 10 月 14 日（金）
- 会場：ファイブブリッジ会議室（宮城県仙台市）
- 参加者数：学生 11 名

【企画目的】

宮城県を中心とした東北在住の大学生に、ボランティア活動などの社会貢献活動に取り組むきっかけを提供する。とりわけ、熊本地震や台風10号による豪雨災害など、自然災害が相次いだこの半年間をふまえ、実際に各地でボランティアした学生がその知見を共有することで、今後東北の学生がどのような支援をできるか考えるきっかけをつくる。

【実施内容】

まず、熊本・宮古でのボランティア活動に従事した学生から、どのような活動をしたか、どのような気づきがあったかといった活動報告が行われた。その後、参加者をいくつかの班に分けて、学生がこれからより役に立てる点はどのようなことか、またより多くの人に伝える、巻き込むにはどのようにすればよいかを考えるワークショップを行った。

【参加者からの声】

- ・ほかの大学の学生の話がたくさん聞き、学べることが多くあってこれからもっと頑張ろうと思った。
- ・いろんな大学のボランティアを経験した方と情報共有できて本当に良かった。
1ヶ月経って改めて自分の中でも整理する良い機会になった。
またボランティアに行こうという意欲がさらに上がった。
- ・こんなにも熱い思いをもった素敵な人たちと出会えることが本当に良かったです。
今後もこういう場があったらうれしいです！本当にありがとうございました。

【まとめ】

熊本地震から半年、台風10号の豪雨災害から1ヶ月ほど経ち、少しずつ関心が薄まり始める時期にあって、より関心を持続させ広めていく方向にするにはどうすればいいか、という想いで企画したが、これらの災害ボランティアに様々なルートで参加した学生が参加し、活発なディスカッションを交わすことができた。

同じ災害ボランティア参加者という中でも、なかなかこのような場がなければ交流する機会、接点もなく、交流できてよかったという声が多く聞かれた。また、この場での出会いから、相乗りしてのボランティア参加という成果が生まれたことも、成果といえるだろう。



■ 「大学生生活の過ごし方」セミナー

【実施概要】

- 日時：2016年11月27日（日）、11月30日（水）
- 会場：TKP ガーデンシティ仙台 21階カンファレンスルームA（27日）
あしなが育英会仙台レインボーハウス ホール（30日）
- 参加者数：学生36名（2日間延べ人数）
- 参加団体：一般社団法人復興応援団（事務局）、アイセック仙台委員会、
NPO法人アスイク、一般社団法人MAKOTO、一般社団法人ワカツク

【企画目的】

大学生生活をもっと充実させたいと思っている大学生に対し、秋からでも参加できるボランティア活動や地域貢献活動を紹介すること。複数の団体が連携してセミナーを開催することで、来場者が具体的な一歩を踏み出すための選択肢をより多く提示すること。

【実施プログラム】

- 11月27日 15:00～17:00 第1部パネルディスカッション、第2部ブース説明会
- 11月30日 19:00～21:00 第1部パネルディスカッション、第2部ブース説明会

【実施内容】

第1部では、参加団体のうち3団体から学生が1名ずつ登壇し、パネルディスカッションを行った。活動を始めたきっかけや、活動を通じて大学生生活がどう充実したのかなどを語ってもらった。

第2部では、参加団体ごとにブースを設けて説明会を行い、15分で時間を区切って参加者ができるだけ多くの団体の話を聞けるようにした。事前に「すぐ参加できる活動カレンダー」を各団体で準備しておき、ブースに来た参加者に手渡すことで、一歩踏み出しやすい状態をつくった。

【参加者からの声】

- ・大学生生活を充実させる「ヒント」を得ることができた。

- ・先輩たちの話を聞いたのはよかった。
- ・インターンなど自分にはまだ早いと思っていたが、今からでも活動に参加して、大学生生活を充実させたいと思った。

【まとめ】

今回は発起団体の復興応援団からお誘いを受けて、学生が主体的に活動できる5団体が連携して開催した。集客で協力関係を築けたことはよかった。

パネルディスカッションで会場の雰囲気緩和が和んだあとに、ブース説明会という流れにしたため、参加者がリラックスして話を聞いていた。

ただ、「何か始めたい」という段階の学生にとっては、ややハードルの高い活動内容が集まった印象で、実際の参加に直接結びついた人数は多くなかった。参加者自身が興味関心を整理できるような事前のワーク等があればより良い結果に繋がったかもしれない。



■とうほく行脚～青森の巻～

【実施概要】

- 日時：2016年12月3日（土）～4日（日）
- 会場：弘前大学、ビューロッジ四季彩、荒馬の里資料館
- 参加者数：学生18名、社会人1名
- ゲスト：佐々木絵里さん、小寺将太さん、嶋中卓爾さん

【企画目的】

①2017年2月開催予定の東北若者10000人会議【2017冬の陣】（以下、第二回ばんにん会議）において、青森県の魅力を参加者に伝えるためには運営メンバーが青森の魅力を誰よりも知る必要がある。また、東北6県への広報の強化や東北各地での仲間を集めていかなければならない。そこで、第二回ばんにん会議の運営メンバーが実際に青森県を訪れることにより、学びだけにとどまらず、現地の若者と交流し、現在・未来の青森県、各市町村に対する議論を深めたり、青森県と宮城県の違いや青森県から宮城県に出て思うことなどを情報共有したりすることで、多角的に青森県への理解・関心を深めてもらう。

②青森県で地域活動に励んでいる学生が、普段接点のない県外に出た同世代との交流によって、今まで以上に地元のことを考えてほしい。また、宮城県で地域活動する若者との交流を図ることによって、ノウハウやその地域ゆへの悩みなどを共有して、お互いの活動をフラッシュアップしていけたらよい。そして、本イベントに参加することによって、第二回ばんにん会議に対して興味を持ってもらう。

【実施プログラム】

7:30 仙台駅前発

↓高速バス（キャッスル号）

11:50 弘前バスターミナル着

↓路線バス

13:00 弘前大学着、図書館集合

13:30~14:10 コンテンツ①（弘前市役所勤務・佐々木絵里さんのお話）

14:10~14:50 コンテンツ②（弘前大学大学院・小寺将太さんのお話）

14:50~15:00 休憩

15:00~16:30 コンテンツ③（ワールドカフェ形式のワークショップ）

16:30~17:00 片付け・整理

17:00 弘前大学発

↓何台かの車に分けて移動

18:30 ビューロッジ四季彩到着

コンテンツ④（食事を兼ねた交流会）

《2日目》

9:00 ビューロッジ四季彩出発

↓シャトルバス

9:30 弘前駅着

9:53 弘前駅発

↓JR 奥羽本線

10:38 青森駅着

11:01 青森駅発

↓JR 津軽線

11:38 蟹田駅着

11:44 蟹田駅発

↓JR 津軽線

12:12 大川平駅着

12:20 荒馬の里資料館到着

12:30~14:00 コンテンツ⑤(荒馬の里資料館の見学&記念館館長・嶋中卓爾さんのお話)

14:20 荒馬の里資料館出発

14:30 奥津軽いまべつ駅(津軽二股駅)到着

15:08 津軽二股駅発

↓JR 津軽線

15:33 蟹田駅着

16:11 蟹田駅発

↓JR 津軽線

16:54 青森駅着

17:20 青森駅前発

↓高速バス(ブルーシティ号)

22:10 仙台駅前着

【実施内容】

《一日目》

第一部は、弘前市役所の職員として弘前市の行政に携わっている佐々木絵里さんから、「地域とつながるということ」をテーマに話をしていただいた。

第二部は、弘前大学大学院に通いながら地域活動に励んでいる小寺将太さんから、「チャレンジしたくなる AOMORI🍏」をテーマに話をしていただいた。その中で、小寺さんが携わった共有型地域インターンシップに実際に参加した八島愛美さんから体験談を話していただいた。

第三部は、「地域とつながるってどういうこと？」と「他大学の若者同士がつながると何が生まれる？」という二つのテーマでワールドカフェ形式のワークショップを行った。

夜はコテージに泊まり、夕食を食べながら昼間にはできなかった自身の活動などの話をする交流会を行った。

《2日目》

今別町にある「荒馬の里資料館」を訪れ、荒馬祭りという一度無くなりかけた地域伝統のお祭りをもう一度立て直した立役者であり、当館の館長でもある嶋中卓爾さんからお話をしていただいた。

【参加者からの声】

① イベント全体の良かったところ

- ・ 普段は聞けない公務員の方の地域との関わり方を知れた
- ・ いろんな人と出会えた
- ・ 自分の視野を広げることができた

- ・実際に訪問し、見ることで、大学の中だけでは知ることのできないことをできたこと
- ・1人1人が前向きに発言してくれたおかげで雰囲気良かったこと。笑いありでとても楽しかったです。
- ・それぞれの参加者が二日間のうちに自分の将来にフォーカスを当てて、改めて考えるきっかけがちりばめられていた
- ・皆さんの「余すところなく自分の成長に繋がりたい」という貪欲な思いが熱かったところ

② イベント全体で悪かったところ・改善すべきところ

- ・交流した感じがしなかった
- ・何をゴールにしたか分からない。
- ・ファシリテーションの技術をもう少し磨くことができればよかった。
- ・広報が足りなかった
- ・細かいとことこの工程がバラバラ
- ・全体をばらけさせて緊張をほぐさせる時間が欲しかった
- ・イベントの企画の詰め方が少し雑に感じる場面が見られた

③ 一日目の学び

- ・大学だけでは知りえないような面白い人がいるということ
- ・行動力の大切さ
- ・地域貢献といっても、商業施設を充実させるための政策と人々の満足度を高めるための政策といった二つの面があるということ
- ・まちづくりにおいて意識すべきもの
- ・「マインド」、何するにしてもまずは自分の気持ちから、ということを改めて確認できた

④ 二日目の学び

- ・自分が好きなことにかける思いや行動力の大切さ、地域活性化における若者の重要性
- ・人口が少ないゆえに祭りの開催が厳しい状況でも、県内、あるいは県外の学生が携わることで祭りを存続させ、町を元気にすることができるということ
- ・自分の誇りへの熱意
- ・自分の戻るべき場所はどこかという問いが得られた

⑤ 今後話を聞いてみたいと思う人

- ・公務員ではない、地域活動を活発に行っている人
- ・弘前市以外の自治体の職員さん
- ・農家や漁師
- ・動画クリエイター

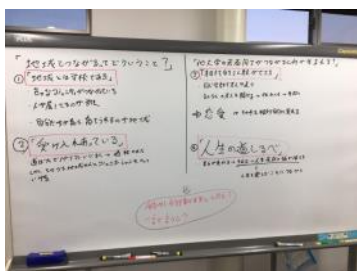
・嶋中さんのような信念をもって物事に打ち込んでいる方

【まとめ】

今回のイベントの目的は、第二回ばんにん会議運営メンバーが多角的に青森に対して興味・関心を深めるため、青森県側からの参加者が今まで以上に地元のことを考えるようになり、さらには第二回ばんにん会議に対して興味を持ってもらうためであった。

参加者からは、「視野が広がることができた」「大学の中だけでは知ることができないことができた」「行動力の大切さに気付くことができた」「何をやるにしてもまずは自分から、ということ改めて確認することができた」といったような声があったことから、本イベントを開催した目的は幾分成功したといえよう。一方で、「何をゴールにしたかかわからない」「広報が足りなかった」「イベントの企画の詰め方が少し雑に感じる場面が見られた」といった声があったことから、改善点も多くみられる。この点は、次回以降同様のイベントを行う際に改善していきたい。

また、今回は、ばんにん会議運営メンバーの取り掛かりの遅さや動きの遅さが露呈して、企画の方を青森県協力メンバーに任せる形となり、第二回ばんにん会議に興味を持ってほしいという当初の目的が薄れたのかもしれない。次回以降は、ばんにん会議運営メンバーがしっかりと企画をして、ばんにん会議が持つ特有のコンテンツを披露してばんにん会議により興味を持ってもらえるようにしたい。



■とうほく行脚～秋田の巻～

【実施概要】

○日時：2017年1月14日（土）

○会場：シェアハウス芥川

○参加者数：学生 18 名（交流会は 26 名）

○ゲスト：須田紘彬さん、秋元悠史さん

【企画目的】

今年度開催予定の東北若者 10000 人会議【2017 冬の陣】において、東北各県の魅力的な企業や文化などを若者に提供するにあたって運営メンバー自身が秋田県の魅力をより深く知る必要がある。また、東北若者 10000 人会議のビジョンにもある東北 6 県への展開を進めていく上で、東北 6 県への広報の強化や東北若者 10000 人会議を経てこれからの一歩を踏み出す若者を東北各地で創出する必要がある。

そこで、今回私たちは秋田県にフォーカスを当て秋田県の魅力を誰よりも知る若者、つまり秋田県で活躍する若者に協力を仰ぎ、東北若者 10000 人会議の運営メンバーが実際に秋田県を訪れることとする。運営メンバーが訪れて現地の若者と交流し、現在・未来の秋田県、秋田県と他の地域の違いや秋田県から宮城県に出て思うことなどを情報共有したりすることで、多角的に秋田への理解・関心を深めたい。

本イベントでは秋田在住の若者と県外に出た秋田出身の若者、同じ東北地方で生活する若者が交流し、秋田に抱く想いを語り合うことができる場所と機会を提供する。

本イベントによる若者同士の交流、地域に根ざした大人の方の想いに触れることで、秋田で生きることの魅力、外からみた秋田県の素晴らしさを感じ、本イベントに参加する若者が一つでも「地元と向き合う」という将来の選択肢を増やし、秋田という地域に“ワクワク”する未来を実現するために自分なりの一歩を踏み出すものとする。

【実施プログラム】

12:30～ 会場準備、ゲスト到着・最終打ち合わせ

13:30～ 開場

14:10～ オープニング

14:15～ グループワーク（アイスブレイク含む）

14:40～ ゲストによるミニプレゼン

15:25～ 座談会

16:00～ 休憩・準備

16:15～ グループディスカッション

16:55～ 個人ワーク

17:10～ エンディング

17:20～ イベント終了 交流会準備

18:10～ 交流会

【実施内容】

まず、最初に自己紹介を含めたアイスブレイクを行いながら、グループワークで抽象的なイメージでいいので「秋田県の良いイメージ悪いイメージ」をポストイットのたくさん書きだした。秋田県への各々のイメージを共有したところで、ゲストの須田紘彬さん、秋元悠史さんに「自分なりの秋田県へのかかわり方」をテーマとしたミニプレゼンを聞いた。その後、座談会でミニプレゼンで疑問に思ったことや気になったことをゲストのお二方にお話しして、最初に行ったグループワークのイメージをより具体的にするためのヒントを得た。

休憩を挟み、再びグループワークを行った。このグループワークでは「秋田（東北）ではこんなことができるのではないか」というテーマでディスカッションを行った。最初に出た良いイメージをふまえて長所を伸ばそうとする意見や、悪いイメージとして上がった課題を解決するための意見が飛び交った。最後に、今日のグループワーク、ミニプレゼン、座談会で学んだことを「あなたの秋田・東北との関わり方」をテーマに個人でのアウトプット作業を行った。最後のグループワークに出た意見に対して自分はどのように関わっていくか各々の考えを持って個人ワークタイムの最後に発表会をした。

夜はそのまま会場のシェアハウス芥川に泊まり、夕食では秋田名産の「だまこ鍋」や「じゅんさい」、秋田の地酒を食べ飲みしながら屋間にはできなかった自身の活動などの話をする交流会を行った。

【参加者からの声】

①イベント全体の良かったところ

- ・ 普段から交流のある須田紘彬さんや秋元悠史さんの真面目なお話を聞くことができ貴重な経験になった。
- ・ 秋田在住の若者と県外に出た秋田出身の若者、同じ東北地方で生活する若者が集まり、それぞれが普段では出会わない人と出会うことができた。
- ・ 秋田との関わり方の選択肢を増やすことができた。
- ・ 1人1人が積極的に発言してくれたおかげで雰囲気良かったこと。真剣に話し合いながらも終始笑いが絶えず楽しかったです。
- ・ プログラムの構成のおかげで自分の考えをまとめやすかった。
- ・ それぞれが秋田・東北かける熱量がすごかった。
- ・ 交流会では、本イベントに参加していなかった秋田の学生も大勢参加してくれて楽しく交流することができた。

②イベント全体で悪かったところ・改善すべきところ

- ・ ファシリテーションの技術不足
- ・ 広報不足による集客不足
- ・ 当日参加が多かった場合、会場がキャパオーバーになることを考えていなかった。
- ・ コンテンツの詰めが甘かった。

③学び

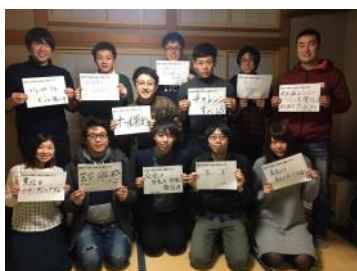
- ・ 現地でしか学べないことを学べた。
- ・ 行動力の大切さ。
- ・ 失敗は恐れることではないということ。
- ・ 多くの人に来てもらうために意識すべきこと。

【まとめ】

今回のイベントの目的は、第二回ばんにん会議運営メンバーが多角的に秋田に対して興味・関心を深めるため、秋田県側からの参加者が今まで以上に秋田のことを考えるようになり、さらには第二回ばんにん会議に対して興味を持ってもらうためであった。

参加者からは、「将来の選択肢はたくさんあることに気づくことができた」「大学では学べないことを学ぶことができた」「行動力の大切さに気付くことができた」「今までぼんやり考えていた今後の秋田への関わり方を明確にすることができた」といったような声があったことから本イベントを開催した目的はある程度達成されたといえるだろう。一方で、「広報が足りなかった」「コンテンツの詰めが甘かった」といった声もあったということから、今後の改善点も多くみられる。この点は、次回以降同様のイベントを行う際に改善していきたい。

今回は、ばんにん会議運営メンバーが主体となってイベント企画をしたため秋田県からの参加者には新鮮さを与えることができた。今回はその新鮮さも相まってイベントは成功したが、今後同様のイベントを企画する際は現地学生のニーズというのも考え、ばんにん会議により興味を持ってもらえるようにしたい。



■東北若者 10000 人会議 2017【冬の陣】

【開催概要】

○日時：2017年2月10日（金）10:00～21:00、2月11日（土）13:00～17:30

○会場：仙台PIT（宮城県仙台市）

○参加者：117名

○ゲスト：

<1日目>

仙台市経済局 白川裕也氏、Terra Drone 株式会社 狭間純平氏、
一般社団法人 MAKOTO 竹井智宏氏、株式会社日本政策金融公庫 森本淳志氏

<2日目：プレゼンター>

株式会社セッションナブル 梶屋 陽介氏、津軽三味線奏者 葛西頼之氏
株式会社チェンジ・ザ・ワールド 池田友喜氏、漆とロック株式会社 貝沼航氏
株式会社箱根山テラス 長谷川順一氏、SHARE VILLAGE PROJECT 武田昌大氏

<2日目：トークゲスト>

株式会社百戦錬磨 三浦 高広 氏、株式会社フロム・インパクト 尾形 哲也 氏
合同会社巻組 渡邊 享子 氏、株式会社メルカリ
株式会社ライフブリッジ 櫻井 亮太郎 氏、株式会社花山サンゼット 阿部 幹司 氏
高橋工業株式会社 高橋 和志 氏、株式会社 HAKKA 小松 勇斗 氏
有限会社アール 丹野 浩行 氏、株式会社ミライクリエイツ 押田 一秀 氏
株式会社エムジョイ 宍戸 優美 氏 一噌 つかさ 氏
株式会社 NOB's Company、カラフル学舎 加藤みつる 氏
INNOVATE99 築瀬裕子 氏、株式会社ハシカンプラ 渡辺元 氏
イノベーションの教室

○実施団体

主催：東北若者 10000 人会議実行委員会

協力：一般社団法人ワカツク

○企画目的

若者に注目されにくい、中小企業の経営者など地域で活躍している社会人と直接話す機会を提供することで、地域に関わる、地域で働くことに対する意識向上とそのための一歩を促すことを目指した。

○実施プログラム

2月10日（金）

10:00～10:20 受付

10:20～15:00 プレゼン /ワークショップ

18:30～21:00 ライブイベント

2月11日（土）

- 12:30～13:00 受付
13:00～13:50 プレゼン / パフォーマンス
 - 【宮城】 梶屋陽介氏、【青森】 葛西頼之氏、【山形】 池田友喜氏
13:50～15:10 座談会 / ブース
15:10～15:50 プレゼン / パフォーマンス
 - 【岩手】 長谷川順一氏、【福島】 貝沼航氏、【秋田】 武田昌大氏
15:50～17:15 座談会 / ブース
17:15～17:30 エンディング

【実施内容】

プレゼンテーションでは、各県代表のプレゼンターより、各々が行っている事業や活動を始めた経緯・東北で事業を行う想いについて、パワーポイントを使用しながら、壇上で10分間程度語って頂いた。

座談会では、椅子を車座状に配置し、参加者とトークゲストが近い距離感で話せる形で座談会をおこなった。座談会の進行は、各ゲストについての予備知識のある運営メンバーが行い、座談会の最後には、次のアクションにつなげるためのアクションカードの記入を参加者に促し、ゲストに提出をした。

【参加者からの声】

- ・就職活動を前に、地元で活躍している経営者のひとと出会えたので良かった。
- ・東北から世界を変えていきたいというような企業があることをしり、東北で挑戦することも視野に入れたと思った。
- ・自分が知らないだけで、東北にも魅力的な企業や人がいることを知ることができた。
- ・自分のできることを、やりたいところでやっていきたいと思う。

【まとめ】

ライブハウスを使った演出やコンテンツなど、これまでのトークイベントとは違う形式で、集客や当日のイベントの演出を行うことによって、本来こういった領域に興味をもっていない若者たちにもリーチすることができた。参加者・ゲスト双方への本イベントに対する期待値の調整を行うべく、参加者・ゲスト双方への事前連絡や、司会進行や座談会のファシリテーションなど、可能な限り細かいフォローを行った。今後は、今回のイベントをマッチングに留めず、具体的なアクションが起こっていくよう、参加者・ゲスト双方に対してアフターフォローを行っていきたいと考えている。



■東北若者 10000 人会議「サキガケ」

【開催概要】

- 日時：2017 年 3 月 10 日（木） 18:30～20:00
- 会場：ファイブブリッジ創造スタジオ「ごくり」（宮城県仙台市）
- 参加者数：14 名
- ゲスト：株式会社建築工房零 小野幸助さん、株式会社パルサー 阿部章さん

【企画目的】

通常の学生生活では出会いにくい社会人と学生とが交流し、地域で働く、地域と関わることの魅力を発見する。地域企業の経営者をゲストとしてを招へいし、多様な視点から地域との関わり、その魅力について知る機会を創出する。

参加者には年度が変わる 4 月になってから新年度の予定を考えるのではなく、一步先駆けて行動に踏み出してもらおうべく、ゲストから学生時代の過ごし方などを話して頂き、何か一步を踏み出す必要性を感じてもらおう。

【実施プログラム】

- ・ゲストのプレゼンテーション
- ・参加者、ゲストを交えて小グループでの座談会
- ・小グループでのワークショップ

【実施内容】

地域で働くゲストをお招きし、勤めている企業・団体での仕事内容や仕事のやりがい、大変な点、地域で働くことの魅力などをお伺いした。

【参加者からの声】

- ・ 地元を大事にすることは素敵だなと思いました。大企業だけでなく、中小企業のことももっと知りたいです。
- ・ 中小企業でもとても先進的な考えを持っていることが分かり、勉強になりました。自分が興味がないと思っている分野や中小企業に目を向けていきたいと思いました。「50年後の未来」を目指して今頑張っている企業があるということにとっても感動しました。
- ・ 「働く」「就活」について他人事であったが、中小企業の話を書いて「ジブンゴト」に感じるようになりました。話し合う機会がたくさんあり、良かったです。

【まとめ】

若手経営者の方をゲストとして呼んだこともあり、参加者からゲストに対して積極的に質問が出るが多かった。また、ゲストから「意識の高い学生に驚いた。学生が運営していることが素晴らしい」「素晴らしい若者との交流、最高でした。」といった満足度の高い声を頂き、双方にとって良いイベントとなったのではないだろうかと思われる。



(2) ボランティアセミナーやフィールドワーク等、未経験者向け体験の場を大学等と協働実施

大学のボランティアセンターや他の NPO 団体、民間企業など、地域と関わるプログラム・リソースを持つ多様な団体と連携して、プログラムを紹介するセミナーや説明会、実際のプログラムなどを実施した。

具体的な活動内容は以下の通りである。

■東北大学スタートアップフェア

【開催概要】

- 日時：2016 年 4 月 8 日(金)、11 日(月)、14 日(木)、20 日(水)、21 日(木)、26 日(火)
6 月 27 日(月)、7 月 1 日(金)、11 月 9 日(水)、11 日(金)
2017 年 1 月 20 日(金)、27 日(金)
- 会場：東北大学川内南キャンパス C 棟教室 (4 月)、厚生会館多目的室 (11 月、1 月)
- 参加者数：4 月実施回 237 名、6, 7 月開催回 5 名、11 月開催回 39 名、1 月開催回 1 名
- 主催：東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室

【企画目的】

学内・学外のボランティア団体がブース形式で参加する、合同説明会です。被災地では、今でも／今だからこそ、学生ボランティアの活躍できる場があります。最近では、震災に限定されないボランティアも活発になってきました。学内・学外の団体が一堂に集まるスタートアップフェアで、自分に合ったボランティアを見つけませんか？

【実施内容】

各団体がブース形式で活動を紹介する。

【まとめ】

東北大学で定期的に行われている、ボランティアの合同説明会に、ワカツクも参加・運営協力（広報など）している。大学公認の組織が実施するイベントということで、学内での広報活動などが学外団体よりも圧倒的に実施しやすく、学生へのリーチは（東北大生限定ではあるが）行いやすいイベントだが、春の新歓時期以外、特に夏と冬のテスト時期は参加者が伸び悩む傾向にあり、参加団体のひとつとして運営のアイディア出しなどにも参画した。

■インターンシップフェア 2016 Summer

【開催概要】

- 日時：2015 年 7 月 2 日（土） 13:00～17:35

○会場：東京エレクトロンホール宮城 401 中会議室

○参加者数：大学生 24 名

○ゲスト：

・ パネラー

阿部 幹司氏（株式会社花山サンゼット 代表取締役）

林 絵梨奈氏（東北学院大学 3 年 株式会社花山サンゼットインターン生 OG）

・ ブース出展団体（敬称略）

株式会社花山サンゼット、一般社団法人ふれいん・ゆに〜くす、株式会社テレワーク 1000
スタッフ、エーアイシルク株式会社、株式会社 TOHO、一般社団法人ワカツク、株式会社
菅誠建設工業、一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校、KAMAROQ 株式会社、アローリンク
ス株式会社、有限会社橋勝商店、シオン株式会社、株式会社マネジメント・ワン不動産、
SoRa Stars 株式会社、ワイケイ水産株式会社、ホテル・エルファロ

○協力（参加団体）：NPO 法人アスヘノキボウ、NPO 法人 wiz、INNOVATE99

【企画目的】

長期実践型インターンシップに挑戦する大学生と企業のマッチングをするイベントを開催した。

学生にとっては、仙台・宮城・東北の企業の社長の熱い思いや興味深い新規事業があることを理解し、主体的な地域貢献をする等、学生生活に目的、意欲を見出し、何かしらのアクションを起こすこと、また企業にとっては、宮城県の大学生と出会い、新規事業の思いや内容、目標などを学生に伝え、認知してもらうこと、企業の方が学生と交流を通して一緒に事業を行う現役大学生たちの特徴を掴むことで、学生を巻き込んだアクションに繋げることを目的とした。

【実施内容】

第 1 部では、長期インターンシップを行ったインターン OG および受入担当者の方をお呼びしてのパネルディスカッションを行った。活動を始めた動機や活動当時に悩んでいたこと、活動を通して成長したことなどを話すことで、参加者への現場で活動することへのイメージと、学生のこの時期にインターンシップに取り組む意味への理解を深めた。

また、受け入れ担当者の方にも、受け入れする側の思いや活動をする上で求めることを話すことで、参加者の当事者意識を高める場になった。

第 2 部では、参加学生と受け入れ団体との個別ブース説明会を行った。

参加学生は、受け入れ団体による 1 分間のプレゼンテーションを聞いたのち、より詳細を聞きたい個別ブースに赴き、活動に対する疑問点を払拭し、具体的な内容を聞いて活動することへのイメージを深め、今後のインターンシップを行うきっかけを掴んだ。

第 3 部では、参加学生が自身のネクストアクションを考えるワークショップを行った。

参加企業の方にもワークショップに入ってもらい、少人数に分けたグループでのディスカッションを通じて、参加学生はこの会で得たことの言語化や、これから挑戦していきたいことを明確化した。最後の発表タイムでは、インターンに挑戦することを宣言した参加者もいた。

最後に全体でフェアの感想を共有し、個別相談の日程調整を行い、閉会となった。

【参加者からの声】

- ・とても良い機会でした。新しい発見、驚きを得て、自分のこれからについて考えるきっかけになりました。
- ・参加してよかったです。半分へこみ、半分興味が増し、という風でしたが、自分というものを見つめなおす時間も頂きました。ありがとうございました。
- ・自分の将来について改めて考えるきっかけになった。

【まとめ】

学生への広報・周知および参加者確保の苦戦が常態化しており、今回も危機感をもって臨んだが、参加者数は頭打ちの傾向を脱せない結果となった。

今回のフェア運営にあたっては、インターン OB/OG の巻き込みに注力し、当日企画や広報施策などに関しても、実行委員として参画した OB/OG と協力して企画立案・実働を行った。実行委員として活動してくれた学生が 2 名にとどまったこと、実行委員の学生自身もほかの活動と並行しながら準備に臨んでいたこともあり、行動量の少なさは今回も払拭されることはなかったが、実際に活動を経験した学生が自らその魅力を次の世代に伝えていく、また伝える場に関わっていく、ということを形にできた点は、今後に向けた収穫である。実際の集客にあたっては、これは過去何度もなされた指摘ではあるが、今回も動き出しの遅さと広報にあたっての打ち手の乏しさが大きく影響した格好となってしまった。

当日の運営に関しては、これまでも同様のイベントを複数回経験していることもあって、役割分担や段取りなどでの多少のばたつきを除けば、総じて大過なく実施することができた。今回は参加者の少なさを逆手にとって、参加者同士のディスカッション、ワークショップを会の序盤にも盛り込むなど、これまでになかった取り組みなども行ったが、大きな混乱はなく、ひとりひとりの学生の声を丁寧に拾うことができたのではないかと思う。



■ インターンシップフェア 2016 Winter

【開催概要】

○日時：2016年12月4日（日） 13:00～17:00

○会場：仙台市市民活動サポートセンター セミナーホール

○参加者数：大学生 18名

○ゲスト：

・ パネラー

渡邊 円氏（現役インターン生、宮城大学3年生）

清野 若菜氏（インターン経験者、東北大学3年生）

・ ブース出展団体（敬称略）

株式会社TOHO、有限会社佐貞商店、株式会社ゾウケイ社、株式会社菅誠建設工業、株式会社パルサー、アサヤ株式会社、株式会社菅原工業、廣田酒造店、有限会社月の輪酒造店、悠和会 銀河の里、高橋酒造店、サンコー食品株式会社、株式会社紫波フルーツパーク、合名会社吾妻嶺酒造店、SoRaStars株式会社、アローリンクス株式会社、一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校、KAMARQ株式会社、株式会社シオン

○協力（参加団体）：復興庁、NPO法人wiz、INNOVATE99

【企画目的】

長期実践型インターンシップに挑戦する大学生と企業のマッチングをするイベントを開催した。

学生にとっては、仙台・宮城・東北の企業の社長の熱い思いや興味深い新規事業があることを理解し、主体的な地域貢献をする等、学生生活に目的、意欲を見出し、何かしらのアクションを起こすこと、また企業にとっては、宮城県の大学生と出会い、新規事業の思いや内容、目標などを学生に伝え、認知してもらうこと、企業の方が学生と交流を通して一緒に事業を行う現役大学生たちの特徴を掴むことで、学生を巻き込んだアクションに繋げることを目的とした。

【実施内容】

第1部では、長期インターンシップを行ったインターンOGの方をお呼びしてのパネルディスカッションを行った。活動を始めた動機や活動当時に悩んでいたこと、活動を通して成長したことなどを話すことで、参加者への現場で活動することへのイメージと、学生のこの時期にインターンシップに取り組む意味への理解を深めた。

第2部では、参加学生と受け入れ団体との個別ブース説明会を行った。

参加学生は、受け入れ団体による1分間のプレゼンテーションを聞いたのち、順番に各社の個別ブースを回り、活動に対する疑問点を払拭し、具体的な内容を聞いて活動することへのイメージを深め、今後のインターンシップを行うきっかけを掴んだ。また、OB/OGによる相談ブースも設け、実際にインターンシップを経験した学生の声から、不安点の解消などにも努めた。

最後に全体でフェアの感想を共有し、個別相談の日程調整を行い、閉会となった。

【参加者からの声】

- ・最後の「できない理由を探すより、どうすればできるかを考える」という言葉が印象に残っていて、どんなことも諦めないでやってみたいと思いました。
- ・今自分が何をしたいのかをよく考え、優先順位をつけながら、様々なことに飛び込んでいきたい。限られた時間の中で時間を有効活用していきたい。

【まとめ】

参加者の数と出展団体数のバランスを考慮して、初めて総当たり形式でブースを回る形式をとったのがこれまでとの最も大きな変更点である。全体の間伸び感が懸念されたが、1ブースあたりの学生数が3~4人という適正人数で進めたため、各ブースで密なコミュニケーションがとれていたようだ。

今回はOB/OGの巻き込みができず、スタッフが中心となつての運営を行ったが、もともと冬は夏と比べて対象となる学生が少ない（実質対象となるのが現1,2年生のみ）ことも重なって、参加者数は夏の回を下回る結果となった。

しかし、直前での呼びかけにも関わらずOB/OGが多数参加して参加者の質問などにも積極的に対応してくれた。OB/OGが当日だけでも場づくり・運営に参加してくれる状態が日常に

なり、活動してきた学生が次の学生に伝える流れができていることは収穫といえるだろう。



■ 郡山仮設清掃住宅ボランティアツアー

【実施概要】

- 日時：2016年12月11日（日）
- 会場：福島県郡山市 南一丁目応急仮設住宅
- 参加者数：学生12名、社会人6名

【企画目的】

応急仮設住宅の清掃を通じて、福島原発事故の問題について考えてもらうきっかけを提供すること。特に南一丁目仮設で暮らす川内村出身の方々は、来年4月に帰村もしくは仮設から退去して別の場所に移住することを求められているため、引っ越しに向けた不安やニーズを聞き出し、今後の支援に生かすこと。

【実施プログラム】

- 7:00 東北大学川内キャンパス集合
- 7:20 東北大学出発
- 9:20 南一丁目仮設到着
- 9:30 オリエンテーション
- 10:00～15:00 清掃ボランティア活動 ※途中、昼休憩あり
- 15:30 活動振り返り、全体共有
- 17:00 南一丁目仮設出発
- 19:00 東北大学川内キャンパス到着、解散

【実施内容】

当日は薄っすらと雪が積もる、寒い日だった。東北大学と福島大学の学生、それに一般の参加者で活動した。現地コーディネイト機関のNPO法人コースターの担当者から、川内村の現状や南一丁目仮設では高齢者の独居世帯しかほとんど残っていない等の現状の説明をしていただき、生活されている方々とお話しする上での予備知識を入れてから活動した。

3人1チームを組み、1チーム当たり2、3世帯を回った。掃除はいいので話し相手をしてほしいという方や、足腰が悪く何か月も掃除ができていないという方、世帯ごとに状況はさまざまだった。換気扇やエアコンといった高齢者には掃除の難しい高いところを中心に、網戸や台所の掃除も行った。

お話しを拒む方もいたが、ほとんどは学生との交流を楽しみにしていて、離れて暮らす家族の話、川内村に戻っても通院が難しいこと等、今後の生活への不安をよく耳にした。振り返り際には、各チームで聞いた話を全体共有し、原発事故の問題に対する学びを深めた。

【参加者からの声】

- ・汚れは落ちてても、汚れないようにするにはどうしたらいいのか考えさせられた。復興支援の次の段階にきていると実感した。
- ・福島県内出身でも知らないことはたくさんあると感じた。被災された方の生の声を聴くことは勉強になった。
- ・復興支援のイベントに参加したことはあったが、自分が役に立てているとは思えなかった。掃除は実際にキレイになって結果が見えるのでよかった。

【まとめ】

今回は、東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室とNPO法人コースターの共催するボランティアツアーに、広報協力と実際に参加した。こうした機会もなければ、仮設住宅にお邪魔してお話しをすることもないので、学生にとっては貴重な機会となった。避難を余儀なくされた上、今度は住み慣れた仮設住宅からの退去を求められている川内村の方々の悲痛な声は、何よりも大きな学びであり、原発事故の問題を自分事として考えるには十分すぎる経験になったと思う。



■インターンシップフェア 2017 Spring

【開催概要】

○日時：2017年2月4日（土） 13:00～17:00

○会場：仙台市生涯学習支援センター 第2セミナー室（宮城県仙台市）

○参加者数：大学生 9 名

○ゲスト：

・パネラー

反保 雄介氏 （インターン経験者、東北大学 2 年生）

菊池 野笛氏 （インターン経験者、東北福祉大学 3 年生）

・ブース出展団体（敬称略）

有限会社佐貞商店、INNOVATE99

○協力（参加団体）：INNOVATE99

【企画目的】

長期実践型インターンシップに挑戦する大学生と企業のマッチングをするイベントを開催した。

学生にとっては、仙台・宮城・東北の企業の社長の熱い思いや興味深い新規事業があることを理解し、主体的な地域貢献をする等、学生生活に目的、意欲を見出し、何かしらのアクションを起こすこと、また企業にとっては、宮城県の大学生と出会い、新規事業の思いや内容、目標などを学生に伝え、認知してもらうこと、企業の方が学生と交流を通して一緒に事業行う現役大学生たちの特徴を掴むことで、学生を巻き込んだアクションに繋げることを目的とした。

【実施内容】

第 1 部では、長期インターンシップを行ったインターン OB/OG に経験談を語ってもらった。活動を始めた動機や活動当時に悩んでいたこと、活動を通して成長したことなどを話すことで、参加者への現場で活動することへのイメージと、学生のこの時期にインターンシップに取り組む意味への理解を深めた。

第 2 部では、参加学生と受け入れ団体との個別ブース説明会を行った。

参加学生は、受け入れ団体による 1 分間のプレゼンテーションを聞いたのち、順番に各社の個別ブースを回り、活動に対する疑問点を払拭し、具体的な内容を聞いて活動することへのイメージを深め、今後のインターンシップを行うきっかけを掴んだ。

最後に全体でフェアの感想を共有し、個別相談の日程調整を行い、閉会となった。

【参加者からの声】

- ・サークルに多く入っていたり、勉強が忙しいからといってできないことはないのだと OG の方の話を聞いて感じました。
- ・面談で自分の課題に気づくことの大切さを実感でき、それを体験を通じて培えるインターンシップに魅力を感じた。また、コーディネーターの内藤さんに突っ込んだアドバイスを頂いて、実際に今までとは異なる環境に身を置いてみたいと思った。

【まとめ】

12月実施回と同様、総当たり形式でブースを回る形式をとった。今回は出展企業数も前回より少なかったため、会全体の時間を短縮し、また各コンテンツに時間に余裕をもたせることで、より密なコミュニケーションをとれるよう工夫を行った。

今回も、事前運営にあたってはOB/OGの巻き込みができなかったが、大学のテスト時期と重なっていたこともあり、もし今後この時期の開催でOB/OGの協力を仰ごうとするのであれば、事前により計画を綿密に練るなどの工夫が必要であろう。もっとも、当日は前回同様、多数のOB/OGが参加してくれ、ブースの運営などにも入ってくれた点は好材料であるといえる。今後は当日の参加に限らず、事前の企画や広報などでよりOB/OGの協力が得られる体制づくりが必要である。



3. 若者が社会に挑戦しつづけるための支援体制の構築

(1) 団体の活動理念・方針を明文化するための講座

■ 「学都ビラキ」における研修実施

上述の通り、独立した講座群としては実施することができず、学生団体のリーダーやこれから活動を立ち上げたい人などに向けたイベントの中で、団体の活動理念や方針を明文化する研修要素を含めて開催した。具体的な実践例として、「学都ビラキ」における実施内容を挙げる。

1月31日の「学都ビラキ」では、ファシリテーションをテーマに、年度替わり、引き継ぎなどが各団体で行われることを念頭に、団体内での議論をより活発に進めるにはどうすればいいか、という研修を行った。この際、ファシリテーションをする前にそもそも自分たちの団体が「どんな組織でいたいのか」を考えることが、議論の質を高めるために必要という観点から、「VMOGST」というフレームワークを用いて、自分たちの組織をどう表すか、ワークショップを行った。



また、2月22日の「学都ビラキ」は「伝え方」というテーマであったが、こちらの回でも、伝え方の検討を始める前に、伝えることができるメディアはどのようなものがあるか、それぞれの特性は何で、どのようなことを伝えるのに適しているか、それをふまえてそもそも自分たちが伝えたいことは何なのか、誰が伝えるべき相手なのか、といった点を考えるワークショップを実施した。



(2) 団体のリーダー・新しく活動を立ち上げたい個人などに向けた研修会

昨年度に引き続き、各個別プログラムに参加する学生向けの研修会を行ったほか、下半期には特定の団体を対象としない（参加者を広く募って行う）研修も継続的に実施した。詳細は下記のとおり。

■学都ピラキ

【開催概要】

○日時・会場・テーマ・ゲスト・参加者数：

日時	テーマ・ゲスト	参加者数
2016年8月26日(金) 14:00~16:30	学生団体ヒアリング調査結果報告・ゲストによるトークセッション ゲスト：佐藤大地氏（東北大OB）	10名 (8団体)
2016年11月23日(水祝) 13:30~15:30	「先輩から引き継いだのはいいけど、このまま同じ活動を続ける…？」(宮城大 One Second Project を事例にしたディスカッション)	8名 (3団体)
2016年12月21日(水) 18:00~21:00	「伝える」(自団体の「価値・魅力」、伝えたいことは何かを考えるワークショップ)	9名 (7団体)
2017年1月31日(火) 18:00~20:00	ファシリテーション・コミュニケーション ゲスト：坂上英和氏 (NPO 法人コースター)	5名 (4団体)
2017年2月22日(水) 17:00~19:00	デザインのプロから学ぶ「伝え方」 ゲスト：伊藤光弘氏 (八木山商會)	6名 (6団体)
2017年3月24日(金) 16:00~19:00 ※1	「学都仙台をもっと“オモシロク”」(団体代表者によるパネルディスカッション、「1000 プロ」報告会)	11名 (7団体)

*会場：※1：青葉の風テラス、それ以外はファイブブリッジ（宮城県仙台市）

【企画目的】

- ・宮城県を中心とした東北在住の大学生に、ボランティア活動などの社会貢献活動に取り組むきっかけを提供すること。
- ・社会貢献活動に取り組んでいる学生団体が抱える課題を明らかにし、課題解決や活動を活発にするための支援に繋げること。

【実施内容】

毎月テーマを決めて、そのテーマに関心のある大学生や学生団体を集める。テーマは台風10号などの時事問題や、学生団体の運営面で共通課題と思われるものを広く扱う。話題提供者を招いてトーク中心にしたり、講師を招いてワークショップを行ったり、イベン

トの形態はテーマに応じて最適なものを選ぶ。

【参加者の声】

- ・自分の思っていることを実際に文字にしてみることで、自分が思っていることもわかり、整理することもできました。自分が思っていないことを、質問されたり、意見をもらうことによって新しく考えさせられるきっかけが生まれました。
- ・いろんな団体の悩みを聞いたり聞いてもらったりして新しい発見が多かったしとても有意義でした。
- ・団体としてやりたいこと、個人としてやりたいことが再確認できた。今後、こういう風にしていったらいいんじゃないかなど多くのアドバイスをいただくことができたので、活かしていきたいと思った。
- ・いろいろな人と交流できてよかった。活動の幅が広がりそう。

【まとめ】

活動を発展させたい、新しくつくりたい個人が集まって意見交換やディスカッションをする場合は、これまでも様々な形で行われてはきたものの、単発になり継続するケースが少なかった。8月からのスタートではあったが、別記した「ジブンビラキ」（熊本地震・台風10号災害の報告会・ワークショップ）を含めれば、下半期はほぼ毎月のペースで実施でき、新しい団体同士の交流の場、本事業の核となりうる素地はできてきたのではないだろうか。

各回には、既存団体でリーダー層、もしくは次期リーダー層として活動しているメンバーはもちろん、これから新しい団体を立ち上げたい（もしくは立ち上げたばかり）という学生にも参加いただき、それぞれの環境や背景の違いをもとに活発なディスカッションが交わされていた。Gakuvo 東北の運営に参画したインターン生の呼びかけにより、リピートで参加してくれる学生が出てき始めているのも、収穫といえるだろう。

今後も、活動をする・始めるにあたって必要なニーズを拾っていきながら、定期的に開催を続けていく。少しずつ参加団体の輪も広がってきたが、これまでリーチできている団体の中でも、まだ一度も参加実績のないところもあるので、リアルの場での定期的な交流・意見交換の機会として、さらに参加者層を広げていきたい。





■Study For Two 宮城学院女子大学支部 ミーティング内研修

【実施概要】

- 日時：2016年9月19日（月）
- 会場：リアルカレッジ（宮城県仙台市）
- 参加者数：学生9名

【企画目的】

Study For Two 宮城学院女子大学支部に所属する学生メンバーのチームビルディングと、学内での活動の認知度向上に向けた情報発信力のアップ。また、立ち上がって1年ほどの学生団体で、団体内での研修が難しい状態だったため、研修設計の考え方や方法を伝えることで自走できる状態をつくること。

【実施プログラム】

- 13:00～13:15 アイスブレイク
- 13:15～14:00 チームビルディング研修
- 14:00～14:05 休憩
- 14:05～15:10 広報のワークショップ

【実施内容】

Study For Two 宮城学院女子大学支部に所属する学生メンバーのうち、代表と広報担当者から、「立ち上がってまだ1年ほどで、もっと活動を学内に広めるために広報の研修をしたいが、団体内にリソースがなく困っている」という相談を受けて、ミーティング内での研修を実施した。

広報というと“手段”に目が向きがちだが、事前のヒアリングで広報に対するメンバー間の温度差があるという情報があったため、チームビルディング研修を行った。自分はどうんな人か？という個人ワークのあと、「冷静⇔情熱」「思考⇔行動」の2軸でまずは自己評価でプロットしてもらった。そのあと、他のメンバーからの評価を受けて、プロットを修正していき、全メンバーのプロットを完成させた。自分では気づいていない他人からの評価を受けることでやる気に繋がったり、チームとしてのバランスを見たときに自分はどう

いう役割を果たせばよいのか気づいてもらったりすることを狙った。女子だけのコミュニティは本音を言いにくい傾向があるほか、禍根を残すと今後の人間関係に影響していくため、言葉の選び方や進行には細心の注意を払った。参加者は予想に反し大いに盛り上がり、互いを褒め合ういい雰囲気になった。

広報のワークショップでは、宮城学院女子大というマーケットの分析や、広報手段の洗い出しと特性を知ることなどの座学をまず行った。そして、参加者を2つのグループに分けて、どんな学生に活動を伝えたいかペルソナ設定を行った。その設定したペルソナに対し、どんな広報手段が有効かをグループごとに考えてもらい、全体に発表して学び合った。

【参加者からの声】

- ・たくさん学ぶことがあり、これからどんどん支部の活動で活用していきたい。
- ・また機会があれば、こうした研修をお願いしたい。

【まとめ】

学生団体のミーティングにお邪魔して研修を行うのは、初めての試みだった。相談に来た学生自身が、団体の現状を冷静に分析できていない様子だったため、複数回ヒアリングを重ねて研修を設計した。

実際にメンバーと話してみると、各々きちんと活動に対する思いがあることがわかり、それを日頃から発信する意識づけが大切だと気づいた。参加者自身もそのことに気づけたようで、その後の活動状況を見てもかなり活発に動いており、研修の効果と言えるのではないだろうか。

時間が限られていたため、研修内容を詰め込み過ぎたのは反省点。後半のワークショップは別の日に分けて開催してもよかったと考えている。



■プロジェクトマネジメントに関する研修会

長期実践型インターンシップに参加している学生を念頭に、プロジェクトマネジメントや活動の理解・アウトプットなどを行う研修を実施した。プログラムのスタート時期、中間点、終了時期の計3回、それぞれ「事前研修」「中間研修」「事後研修」という形でプログラムを実施している。

【開催概要】

○日時：

〔事前研修〕 2016年4月2日、4月30日、9月19日

〔中間研修〕 2016年7月23日、12月23日

〔事後研修〕 2016年4月2日、4月10日、11月6日

○会場：ファイブブリッジ会議室（仙台市）

○参加者数：合計で学生30名、社会人22名

【企画目的】

〔事前研修〕

長期実践型インターンシップをスタートした学生・受入先企業・団体向けに、インターンシップを行っていくうえでの基本的な心構えなどを確認した上で、成果を出すための目標と半年間のスケジュールを設定することで、6か月間のスタートダッシュを切ることを目指して実施した。

〔中間研修〕

インターン開始から約3ヶ月の行動を振り返るとともに、成果を出すための目標とスケジュールを再設定するとともに、他社と合同で行うことで、仲間意識や競争心を生み、プロジェクトの成果を上げることへの意欲がアップすることを目指して実施した。

〔事後研修〕

半年間のインターンシッププロジェクトの振り返りを行うとともに、いいところをさらに伸ばし、反省点を改善するにはどうすればいいか仮説を出すこと、また事業及び自分のネクストステップを考え、決めることを目指して実施した。

また、すべての研修に共通して、個別のコンテンツ内では、プロジェクトの進み具合や成果が俯瞰的に把握できていること、悩みや課題がシェアされ、アイデア交換が行われること、より高い目標設定や行動計画ができ、その達成に向けて学生も企業もスイッチが入っているなどの状態を目指した。

【実施内容】

〔事前研修〕

回によって時間配分や実施内容が異なるが、概ね学生に対しては3部構成、受入先企業・団体担当者向けには2部構成を基本のフォーマットとして実施した。

学生向けでは、第1部で「働く」ことへの心構えについてのワークショップや、基礎的なビジネスマナーの研修を行い、インターンシップ中に求められる態度や意識について考えを深めた。

第2部では、インターン先の事業内容についてのプレゼンや、タスクを作業レベルまで分解して行動計画を立てるワークショップなどを行い、実際にこれから半年間取り組むプロジェクトや、日々の仕事の進め方についての理解を深めた。

企業・団体担当者向けでは、第1部でインターンシップ実施にあたっての不安や疑問点の解消、インターンシップ実施中に起こりうるリスクの洗い出しと対応策の検討、学生に対する接し方の社内での役割分担をワークショップ形式で行い、社内での受け入れ態勢の確認と整備を図った。

最後に、学生と企業・団体担当者合同でのセッションを行った。改めて6か月間で取り組むプロジェクト内容の確認を行うとともに、ワークシートを使って、誰のために何をするのかを改めて整理し、最後は、6ヶ月間のチャレンジ目標を発表し合った。

〔中間研修〕

インターンシップ生から、3ヵ月間の振り返った進捗プレゼンテーションを行った。

その後、これまでの3ヶ月間を振り返るとともに、ワークシートを使って、誰のために何をするのかを改めて整理し、インターンシップ生同士でブラッシュアップをし合った。最後は、残り3ヶ月のチャレンジ目標を発表し合った。

学生研修・合同研修1・分科会・合同研修2の4部構成で実施した。

学生研修では、インターン開始時に立てた成果目標と現在の進捗度を自己評価して、うまくいっている点や課題を抽出するとともに、目標を100%達成した状態をイメージするワークショップを行って、目標達成に対する意識の再醸成を図った。

続いて、学生と受入企業・団体担当者合同で、各社のプロジェクト状況のプレゼンテーションを発表するとともに質疑応答を行い、お互いの状況を共有し合った。

その後、学生と受入企業・団体担当者に分かれての分科会を実施し、プロジェクトを加速させていくためのアイデア出しワークショップなどを行った。

最後に再び学生と受入企業・団体担当者合同で、ワークシートを使って、誰のために何をするのかを改めて整理し、残り3ヶ月のチャレンジ目標を発表し合った。

〔事後研修〕

まず始めに、インターンシップ生から半年間の成果を振り返るプレゼンテーションを行った。

その後、学生と企業担当者に分かれ、プロジェクトの当初の目標と成果、実際の取り組み内容、ネクストアクションなどをそれぞれワークシートに記入して、お互いに発表した。それをもとに、全体でディスカッションしていく中で、半年間の成果を深掘しながら、言語化できるようにしていった。最後に、再度学生と企業担当者両方で集まり、ネクストアクションの発表とインターンシップ生へ向けたフィードバックのセッションを行った。

【まとめ】

〔事前研修〕

各企業・団体ごとのインターン開始時期にばらつきがあったため、春に実施した事前研修に関しては、全体を2回に分けての実施になったが、いずれも休日に終日を使って実施することができ、予定していた内容は滞りなく1日で完了することができた。いずれの回も複数人が参加して行うことができたため、ワークや目標設定なども複数人で行い、横のつながりをつくとともに、切磋琢磨し合いながら目標達成の意欲を高める、という機能は果たすことができたのではないかと考える。

ビジネスマナーなどの知識面に関しては、それまでのアルバイトなどの経験によって、できるできないの差があったが、いずれにせよ体系的に学んだことがある学生は少なく、それぞれ参考になった点があったのではないだろうか。タスク分解などに関しては、例年まだ実際のインターンへの取り組みが浅い状況では、具体的にイメージすることが難しく、実際の業務にいかせるレベルまで落とし込むには至らないケースが多いが、今回も例外ではなかった。複数人をまとめて実施している都合上、既にインターンが開始している状態で参加しているプロジェクトもあったが、それでもまだ自身の業務について体系的に把握できている人は少なく、今後も重点的にフォローしていく必要がある領域である。

プレゼンテーションやワークの時間などの見直しや、コンテンツの絞り込みなどを行い、時間短縮をはかって参加者の負担が軽減しながらも、学びの深さには変わりがないよう工夫を行った。今後も随時コンテンツの見直しを行っていく。

〔中間研修〕

2日間の実施を試行していた時期もある中間研修だが、今年度は1日間の実施とし、2日間開催の場合は前日研修として実施していたプレゼンテーションの練習・ブラッシュアップの時間を研修外とした。全員一斉でプレゼンテーションを見る、フィードバックする機会が合同研修しかなくなり、プレゼンテーションの質が下がることが懸念されたが、感覚として細かい点にはそこまで大きな差はなく、必ずしも2日間にせずとも、方法次第では振り返りの質を担保することはできると考える。ただし、事前のプレゼンチェックが各個人まかせになったことで、人によっては盛り込んでほしいポイントがそもそも落ちている、というケースは存在した。参加者の負担軽減という観点もあり、今後事前のプレゼン練習・フィードバックを研修のコンテンツに盛り込むかどうかはさらなる検討が必要だが、いずれのケースでも、第三者による確認・フィードバックがしっかり行われる環境で当日に臨むことは不可欠である。

各プロジェクトで目標へ向けた達成度や進捗状況は様々であり、またボトルネックになっている点も異なっているが、お互いの活動内容や悩みを共有することで、今後の活動へのヒントが得られたほか、改めて口頭やプレゼン資料など様々な形でアウトプットする、それに対して質問やフィードバックを受ける、というプロセスを経ることで、あいまいになっていた箇所や今後深めていかなければいけない点などを明確にする場ともなった。

また、参加者の負担軽減とともに、より集中してコンテンツを行う観点から、企業担当者向けの研修の時間を絞り、拘束時間を軽減した。

〔事後研修〕

4月に実施した回は、参加者の予定の都合上2回に分けての実施になったほか、時間の都合上時間枠を縮小しての実施となった。事後研修は、それぞれが半年間やってきたことへの意味づけや成果の振り返りを行っていく回ではあるが、実施が分散されたことで比較材料となる他のプロジェクトについて聞ける数が減ったこと、またそもそもの時間短縮により振り返りを行える総量としての時間が減少し、研修の時間内では十分に振り返りきれないプロジェクトも散見された。

項目を細かく分けて振り返りを繰り返していくという立てつけ上やむを得ないことではあるが、各項目の振り返り、思考に使える時間がそれぞれ短時間になり、半年間やってきたことにはどんな意味があったのかを振り返り、自分の言葉として納得する形で言語化する、というところまでできた学生とそこまで至らない学生の差が出たのは例年通りであった。また同様に、この経験をどのように生かすか、を必ずしも次の行動目標・ネクストアクションに明確に結びつけきれない学生も多かった。他のプログラムでも起こる現象はあるが、決められた期間が終了した後にはどうしても「燃え尽き症候群」のような状況が起きやすく、振り返りが中途半端になってしまう、という学生は多い。研修前の時間の使い方、宿題の出し方など、期間中からも声掛け・意識づけを行っていったり、期間終了後のコミュニケーション量などを増やしたりするなど、より踏み込んだ方策の検討が必要だと考えられる。



■ インターンシップ成果報告会

【企画概要】

○日時・会場・参加者数・ゲスト：

日時	2016年5月8日（日）14:00～18:30	2016年12月17日（日）15:30～19:30
会場	エル・ソーラ仙台 大研修室（宮城県仙台市）	仙台市福祉プラザ 第1研修室（宮城県仙台市）
参加者数	学生9名、社会人7名	学生3名、社会人6名

<p>ゲスト (審査委員)</p>	<p>NPO 法人 G-net 共同代表 南田修司氏 ウラバタケ Café 小玉仁志氏 公益財団法人地域創造基金さなぶり 専務理事・事務局長 鈴木祐司氏</p>	<p>(株)御稜川 代表取締役社長 森山奈美氏 東北経済産業局 地域経済部 産業人材 政策室 係長 古川康平氏 復興庁 宮城復興局 政策調査官 青砥穂高氏 (株)コー・ワークス 代表取締役社長 淡路義和氏</p>
-----------------------	--	--

○協力：innovate99

【企画目的】

半年間の長期実践型インターンシップの成果を対外的に発表し、評価をいただく。インターン生がインターンの成果をプレゼンテーションという形にまとめることで、インターンの成果や学びをより深く整理し、今後のアクションへとつなげる。

【実施内容】

半年間のインターンシップを修了したインターン生（5月開催回は8名、12月開催回は7名）がプレゼンテーションを実施し、質疑応答を行った。また、審査の時間を利用してインターン生複数人でのパネルディスカッションや、参加者からの質疑応答タイムなどを行った。最後に、審査委員から講評・投票をいただき、優秀賞を選定した。

【まとめ】

インターン生にとっては、自身の半年間の取り組みの成果を発表し、外部審査員からの質疑応答・講評を通じて、自らの取り組みを客観的に再認識する機会となった。また、プレゼンテーションの作成・ブラッシュアップの過程を通じて、半年間の学びを言語化する機会にもなった。参加者にとっては、特に学生については、地域と関わること、自分の力を伸ばすことなど、学生時代にやっておくことの選択肢を増やすとともに、学生生活におけるロールモデルを発見する機会となった。

いずれの回も、取り組みに関心がある学生や企業など、多様な方を集めて開催することができたが、インターン生の発表を対外的に行う数少ない機会であるため、より多くの人に発表を見てもらえるよう広報周知にはより力を入れる必要がある。また、この発表内容などを他の広報手段において活用するなど、インターン生の「生の声」をいかに外に広げていくかも今後の課題である。



■大学生の自己啓発及びプレゼンテーション能力向上研修会

【企画概要】

○実施回数・参加者数：全3回開催 11名参加

○会場：いずれもワカツク事務所（仙台市）

【企画目的】

自分の背景やこれまでの様々な体験や経験を振り返り、他者に伝えることによって他者から承認され自信をつけるために、過去の振り返りの方法や他者へ伝えるコツ、相手から話を引き出す手法などについて学ぶ。

【実施内容】

下記3種類の内容を日替わりで行った。

・少人数コミュニケーション

相手と会話をしながら互いの事を深堀するための手法についてのワークショップを行った上で、どのようにしたら相手と適切にコミュニケーションがとれるか、自己開示ができるかを学び合った。

・自身の振り返り、プレゼンテーション作成

自己の振り返りをした上で、相手と会話をしながら互いの事を深堀するための手法についてのワークショップ、自身の経験を可視化して、紙芝居形式のプレゼンにまとめるワークショップを行った。

【まとめ】

今年度も通年で実施を行った。前年度課題として挙がっていた、それぞれの開催が単発なもので終わってしまい、年間としての一貫性を持たせることができなかったという点を改善するため、開催時期の偏りを見直し、年間通して平均的に開催できるよう意識してスケジュール設定を行った。しかし、一番のニーズ増の要因となりうる、高校企画の実施時期について時期の偏りを解消しきれなかったため、単独の取り組みでは徹底しきれなかった部分もある。

コミュニケーション手法や自身の振り返りなど、いずれも一人で行うことが難しい内容

であるため、集合型研修として複数人で行う効果は大きく、参加者満足度も高かったが、同時に「もっと深めてやりたい」という声も見受けられた。研修実施後もどのようにフォローを行っていくかは継続的な課題である。



■「カタリ場」のリーダー層向け研修会

【企画概要】

○実施回数・参加者数：全 11 回開催 71 名参加

○会場：いずれもワカツク事務所（仙台市）

【企画目的】

「カタリ場」の現場・各企画で、学生ボランティアをまとめるリーダー層を務める学生を念頭に、よりよいコミュニケーションやリーダーシップをとれるよう、必要な心構えやチームのマネジメントの考え方、メンバーとの接し方を学ぶ研修を行った。

【実施内容】

対象別に下記 2 種類の内容を行った。

・リーダーシップ開発

「カタリ場」でひとつの高校企画をつくる「プロジェクトマネージャー」という役割を例に、自己の振り返りをした上で、どういったコミュニケーション、リーダーシップが求められるかを可視化するワークショップを行った。

・マネジメント

実際にリーダー層を務める学生を念頭に、まず、リーダーを務めるにあたって必要な心構えやとるべき態度、振る舞い方をレクチャーした。その上で、メンバーとの接し方、よりよいチームビルディングの方法について、事例を基に共有・ディスカッションを行い、各自で当日の振る舞い方、動き方のイメージの明確化、共有を行った。

【まとめ】

レクチャーやディスカッションを通じて、必要なスキルや事例を基にした知見を取り入れるということはもちろんだが、同じリーダー層としてプログラムに関わる気概を持つ仲

間との直接の対面、コミュニケーションを通じて、お互いの想いを確認し合い、モチベーションを高めるという観点も本研修の機能として大きく、無視できない。その観点で言うと、必ずしも回数を多く実施することが適切とはいえず、むしろ回数を少なくして一回ごとの参加者数を増やす、より多くの「想い」が交錯する場をつくるほうが、研修の効果を高めるには必要とも考えられる。開催頻度も含めて、今後の検討課題としたい。

既にリーダーシップポジションを経験している学生が研修に混ぜられることで、学生相互の学び合い、教え合いを行っている場面もみられ、会としての成熟度合いは徐々に上がってきているのではないだろうか。



(3)活動を体験した若者の振り返りを兼ねた研修会、高校生を含めた下級生に伝えるセミナー等の実施

活動を体験した学生が、高校生などに想いを語るイベントを開催し、参加学生が、他者から承認され、自信をつけられるような講座・プログラムの開発・実施を行った。具体的な活動内容は以下の通りである。

■「カタリ場」の高校現場での実施

【開催概要】

	開催日	会場：	参加者数
1	2016年7月12日（火） 11:20～17:30 （本番は14:25～16:15）	宮城県泉松陵高等学校 （宮城県仙台市）	学生 52 名 受講者数 279 名
2	2016年7月29日（金） 16:00～21:30 （本番は19:00～21:00）	宮城学院高等学校 （宮城県仙台市） ※会場はベルサンピアみやぎ泉 （宮城県黒川郡大和町）	学生 19 名 （受講した高校生 39 名）
3	2016年10月18日（火） 11:00～17:30 （授業は14:20～16:10）	東北学院中学校 （宮城県仙台市）	学生 42 名 （受講した中学生 160 名）
4	2017年2月24日（金） 10:30～16:30 （授業は13:30～15:30）	盛岡中央高等学校 （岩手県盛岡市）	学生 36 名 （受講した高校生 138 名）
5	2017年3月6日（月） 8:40～14:45 （授業は10:00～12:35）	仙台市立仙台大志高等学校 （宮城県仙台市）	学生 38 名 （受講した高校生 70 名）
6	2016年3月15日（水） 10:00～14:40 （授業は11:00～13:00）	山形県立鶴岡中央高等学校 （山形県鶴岡市）	学生 50 名 （受講した高校生 222 名）

【企画目的】

大学生が自分の経験や体験談を高校生に向かって話すことによって、高校生が将来に向けて自分ができることを考え、それを友達に伝え、他者に認めてもらうことを促す。

【実施プログラム】

- ・自己の振り返りに関するワークショップ
- ・相手と会話をしながら互いの事を深堀するワークショップ

【実施内容】

大学生ボランティアスタッフが主体となり、自己の振り返りをして高校生に対して話すこと、相手と会話をしながら互いの事を深掘するというワークを実施した。

【参加者からの声】

- ・生徒さんから逆に元気もらいました。
- ・最初は緊張でうまくいくなぁーと不安だったけど、いざ迎えるとあっという間でもっと時間がほしかった。
- ・参加してみて、本当に学びの多い時間でした。人と向き合うことの難しさ、楽しさ、多くの経験ができました。一度きりのカタリバでなく、これから向き合い続けていきたいと思えます。

【まとめ】

宮城県・山形県・岩手県内の中学校・高校での実践を継続して行うことができた。今年度は初めて定時制の高校での開催、また昨年度はNPOカタリバが主体となって実施していた、山形県内の高校、宮城県内の中学校での実践を今年度幣団体に実施主体を移して実施でき、さらなる展開の広がりを見せることができた。NPOカタリバが主体となって実施したものの引き継ぎを含めると、継続的に実施する学校が過半数を超えたことで、学校とのコミュニケーションや経験値の蓄積などもあり、活動の軸は変えないながらも、より質を向上したり、代替わりに備えたりするための新しい取り組みなども少しずつ加えることができるようになってきている。

また、この取り組みを宮城・山形を中心として活動していく事務局メンバーとして11名の学生が活動したほか、全企画合計で延べ60名以上の学生に、リーダー層として場を創る経験を提供できた。

今後も引き続き、「カタリ場」を宮城・山形を中心とした東北地域の高校で展開をしていく。立ち上げから3年が経過し、組織の基盤を創っていく段階から徐々に次のステージへの発展を模索していく中で、ボランティア活動や学生団体の活動を経験した大学生を今まで以上に多く呼び込み、自分の想いをアウトプットしてもらうことを通じて、各自がこれまでの自分の活動を見直し、次の行動への意識をより高い段階に引き上げる機能を高めていくための各種施策をさらに発展させていく。また、組織運営の観点からは、草創期の活動を形作ってきたメンバーが昨年度から今年度にかけてほぼ卒業し、「第二世代」が活動の主体となってくる。本事業で支援している多くの団体でも、引き継ぎが大きな課題となっており、これまでつくってきた勢いを失わせないためにも、より多くの人々がリーダーシップを発揮する、自ら主体的に場を創っていくといった活動を通じて、憧れや尊敬が生まれ続けるコミュニティを形成していく。



4. 課題と若者をつなぎ、活動する若者を地域で支える環境整備

(1) 大学でのカリキュラムの運用サポートと高度化

大学と協働でボランティアやフィールドワークを実施するとともに、これらの活動が大学で単位化されたり、正課としての活動として実施できたりするような、カリキュラムや評価手法などの開発・環境整備に取り組んだ。具体的な活動内容は以下の通りである。

■県内での多大学連携による、学生の主体的な学びに関する評価手法の開発

東北学院大学「地（知）の拠点整備事業（大学 C0C 事業）」で実施されていた、評価指標開発の取り組みが、「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（C0C+）」に採択された「みやぎ・せんだい協働教育基盤による地域高度人材の育成」事業に引き継がれ、弊団体渡辺が引き続き参画した。

学生の主体的な学びをどう評価するか、地域人材になりうる人をどう評価するかという点について、「地域高度人材指標」開発の議論が進み、たたき台となる評価指標ができた。来年度から評価指標を使つての評価の試行が実際に開始する予定で、弊団体においても、関わり合いが深い学生に対して実施を試行する予定である。

■東北学院大学全学カリキュラムの改訂支援

東北学院大学「地（知）の拠点整備事業（大学 C0C 事業）」と連携し、東北学院大学の全学カリキュラムの改訂の支援を行い、平成 27 年度より新カリキュラムが実装された。

東北学院大学では、大学 C0C 事業の取り組みとして、学生が地域の課題解決に取り組む活動を、正課の講義・学生の学修活動の一環として行える環境づくりを図るため、カリキュラムの改訂作業を進めていたが、その中で、ボランティア活動を通じた地域課題解決の取り組みの部分について、上記の取り組みなども含め、カリキュラム、研修、評価手法などの開発に協力していた背景があり、引き続きオブザーバーとして取り組みに参画している。現在は実際のカリキュラム運用が始まり、出てきた課題点や、他大学に展開するにあたって必要な改善点の見直しを行っている段階である。

■多大学連携枠組みへの参画（東北インターンシップ推進コミュニティ）

岩手県立大学が幹事校を務め、宮城・岩手・山形・福島の 7 大学・短大が参加する「東北インターンシップ推進コミュニティ」に、運営委員として引き続き参画した。

後述する「企業と大学のためのインターンシップ研修会」の実施協力など、地域での活動を大学として制度化していくために必要な基盤整備やコーディネーター養成について、構成機関として協力した。

■東北学院大における授業実践

2年生向けの必修授業「地域の課題」を弊団体の渡辺が新規に担当した。復興過程でネットワークになっている地域企業の課題を見つけ、自らの言葉で説明できるようになることを目標とする授業で、本年度は文学部、教養学部向けに開講された。今後、他学部でも開講される予定である。

■東北大における授業実践のサポート

展開ゼミ科目「地域中小企業の魅力発見・発信プログラム」の運営サポートを行った。地域との関わり方を考える上でひとつの重要なステークホルダーである「地域企業」について、どのような課題があるのか、またそれらの課題を克服するために私たちがどのように関与できるのかを考え、理解と考察を深めることを目的とする授業で、全学部の1年生向けに開講された。

■東北大学震災ボランティア支援室との連携

東北大学学内での震災ボランティア活動を支援する東北大学震災ボランティア支援室の連携団体の一つとして、定期的に行われる連携会議への出席・運営協力を行った。なお、次年度はこの連携をさらに発展させ、先方の後継組織となる「高度教養教育・学生支援機構 課外・ボランティア活動支援センター」の藤室特任准教授が担当する授業の運営協力を実施する予定である。

(2)地域コーディネーター養成講座の共同開催

「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」の中の枠組みでの実施や、沿岸部などに所在する他のコーディネート機関などとの共同実施といった選択肢を想定し、模索していたが、関係者間の調整やスケジュール、必要とされている内容面などでの調整がつかず、弊団体単独での開催を2度行った。

そのほか、他団体が実施しているコーディネーターの養成講座・研修などの企画に、コーディネーターの派遣を行ったほか、上述の「復興創生インターン」の中でも、コーディネーター向けの研修の機会を継続的に持ち、コーディネーター養成の機会を担保した。

■地域コーディネーター向け勉強会

【企画概要】

○日時・会場・参加者数・ゲスト：

日時	2016年5月8日(日) 10:00~12:00	2016年12月17日(日) 13:00~14:30
会場	エル・ソーラ仙台 研修室(宮城県仙台市)	ファイブブリッジ会議室(宮城県仙台市)
参加者数	社会人6名	社会人6名
ゲスト	NPO法人G-net 共同代表 南田修司氏	(株)御襖川 代表取締役社長

	森山奈美氏
--	-------

【企画目的】

地域コーディネーターとして活動していく上で大切にすべきことや他地域での展開事例などを、実際に各地でコーディネーターとして活躍している方に直接お話を伺うことで、各自が知見を蓄積する。また、コーディネーター同士が交流し今後も円滑に情報が流通していくようなつながりを形成する。

【実施内容】

ゲストの方からその地域での取り組みの実例や、コーディネートを行う際に心掛けていることなどをお話しいただいた。その上で、参加者から自由に質疑応答を行い、参加者の疑問点・不明点などの解消を図った。

【まとめ】

別イベントで他地域のコーディネーターを招聘する機会と合わせて、コーディネーター向けの研修機会を年2度開催した。いずれも他地域で代表クラスとして、10年以上のコーディネーターとしてのキャリアを積み重ねている方で、その地域での事業展開の変遷なども含め、率直にお話しいただき、東北のコーディネーターが抱えている状況などに共通する部分などもお話しいただけたのではないだろうか。質疑応答の場でも、リアルな悩みなどがぶつけられ、率直な意見交換がなされた。

■「企業と大学のためのインターンシップ研修会」実施協力

岩手県立大学を幹事校とし、弊団体も運営に携わっている「東北インターンシップ推進コミュニティ」が主催した、「企業と大学のためのインターンシップ研修会」で、ゲスト招聘や当日運営などの実施協力を行った。

本研修会は、学生がインターンシップという形で地域に関わる際のコーディネーター（専門人材）の育成の取り組みの一環として実施されていたものである。

【企画概要】

○日時：2017年1月30日（月）13:30～17:40

○会場：東北学院大学 土樋キャンパス ホーイ記念館

【実施内容】

◆第1部

「地域が人を育て、人が地域で輝くしくみづくりに向けて」

講演者：東北経済産業局 地域経済部 産業人材政策室長 遠藤 憲子氏

「伴走型人材確保・育成支援モデル事業について」

講演者：復興庁 参事官 武隈 義一 氏

基調講演「名古屋産業大学におけるインターンシップの取組み、インターンシップのリスク等について」

講演者：名古屋産業大学 大学院 環境マネジメント研究科 教授 石橋 健一氏

◆第2部

□分科会

〔分科会1〕インターンシップリスクマネジメント ワークショップ

(実際に起こったインターンシップ中のリスクを検証し、円滑で効果的な運営を考える)

講演者：名古屋産業大学 大学院 環境マネジメント研究科 教授 石橋 健一 氏

名古屋産業大学 環境情報ビジネス学部 特任講師 丸岡 稔典 氏

〔分科会2〕実践型インターンシップ ワークショップ

(実践型インターンシップを導入して業績を伸ばしている企業代表者や東北地域以外のコーディネーターをお招きし、ノウハウを学ぶ)

講演者：一般社団法人 ワカツク 代表理事 渡辺 一馬

□全体会

■「復興創生インターン」の運営サポート

復興庁の事業として実施された「復興創生インターン」において、コーディネーター支援の一環として、学生向け研修などプログラム運営の一部についてサポートを行った。本プログラムでは、石巻・女川・大船渡・釜石の地域企業で全国から集まった大学生が3週間～4週間程度、該当する地域と直に触れながら、課題解決にあたるインターンシップを経験した。

(3) 地域課題の可視化に向けた調査

■「東北1000プロジェクト」のリニューアルに向けた調査

昨年度に引き続き、ウェブサイト「東北1000プロジェクト」のリニューアルを行うため、必要な調査を実施した。

昨年度の段階では、より多くの人々が課題を見つけ解決する担い手となるべく、課題を見つけた人が乗せられる仕組みにしていくため、必要なシステム等のリニューアル案の構築を行っていたが、本年度は実際のリニューアルに必要な制約条件・リソース・周辺環境のより詳細な絞り込みを行い、現実に運用可能性の担保できる案の構築から、実際のサイトリニューアル作業を進めた。その結果、サイトの目的を達成し、運営を早期に軌道に乗せるという観点から、現段階では、インターン生などを中心とする運営スタッフが更新作業を担うことを前提に、サイトの構成を行っていくことになり、実際の構築・運用開始まで

こぎつけることができた。

■台風・地震災害におけるボランティア派遣の調査

昨年4月に熊本県で起きた地震、また8月末に岩手県で被害を出した集中豪雨被害において、被災地域への学生ボランティア派遣をどのように行えばいいか、またどのようなサポートが必要なのか、どのような分野での活動が求められているかなどを把握するため、現地の訪問や実際の活動への参加、関係機関などとの意見交換を行い、調査を実施した。この調査結果を基に、宮古市へのボランティア派遣やイベントを通じた学生への情報提供につなげた。

〔視察実施場所とスケジュール〕

熊本県南阿蘇村・益城町：2016年9月4日（日）～6日（火）

岩手県釜石市：2016年9月8日（木）～9日（金）

岩手県宮古市：2016年9月10日（土）～11日（日）

熊本県熊本市：2017年1月17日（火）

■WEBでの情報発信・マーケティング力向上のためのプログラム開発・調査

インターネット全盛の時代である昨今において、活動を広めていくために必要なWEBでの情報発信が重要になってきているが、これらを体系的に学べる機会は少ない。本事業でも「東北1000プロジェクト」の運用が本格スタートし、学生団体・学生による地域活動のポータルサイトとして機能することを目指しているが、まだまだ認知度が低いのが現状であり、より認知度を高め、多くの人に活用してもらうためにも、情報発信・マーケティングの力を強化していく必要がある。また、学生団体におけるWEBの活用という点にも注目すると、人的・資金的リソースが限られている学生団体が、必要に応じて機動的な対応を行ったり、必要な施策を実施できるようになったりするためには、各団体の実情や使用しているメディアに応じて、それぞれの団体内で施策を内製化し実践できることが必要である。これらの課題を解決し、各団体が情報発信力を向上することができるよう、WEBでの情報発信における課題を整理し、必要とされるプログラムの開発を行った。また、ワカツクで先行的に、このプログラムに基づいた取り組みを一部実施している。なお、この取り組みについては、WEBマーケティングを専門に行なっている株式会社フロム・インパクトと共同で行った。

■広報・プロモーション力向上のためのプログラム開発・調査

チラシやSNSなど、自らの活動を広報するための手法は様々な存在し、またチラシのデザインやSNSの文言をどうすればいいか、という具体的な「ハウツー」へのニーズは学生団体の中でも顕在化されているが、実際には「誰向けに」「どのような」メッセージを発信すべきか、といった、具体的なスキル・テクニック以前の問題に課題を抱えている団体も

少なくない。こういった団体やメンバー向けに、広報・プロモーションを行う以前に必要な「伝え方」や団体内での「合意形成」をどのように進めていけばよいか、これらの手法を学生が自ら学び実践するために必要なプログラムの開発を行った。なお、この取り組みについては、広報・プロモーションについて造詣が深い、伊藤光弘氏（元電通東日本クリエイティブディレクター）と共同で行った。

■コーディネーターの課題解決力向上のためのプログラム開発・調査

学生が地域や地域課題に取り組み、活躍するために必要な要素として、コーディネーターの存在は近年ますます重要になってきており、本事業においてもコーディネーターの養成・能力向上に向けた取り組みは重点的に取り組むべき領域のひとつである。一方で、コーディネーターに必要な能力は多岐にわたり、また「目に見えない」能力がほとんどであること、明確な資格基準などが無い職能であり、個人の持つ背景などにより持つ資質がバラバラであることなどは、コーディネーターの活躍できる領域を増やし、より多くの学生の活躍を促進するために解決すべき課題である。特に、ここ数年で起きる変化として、学生が地域に関わるプログラムが今後大学などでも本格導入されることで、より多くの学生にとって現実的な機会となり、コーディネーターと学生の接点が増加することが予想される。その際、これまでは機会を自主的に見つけてきた、意欲の高い比較的少数の学生との接点を中心だったのが、それ以外の学生との接点も増加し、コーディネーターに必要とされる資質・持つべき視点も変わってくる。そこで本年度は、コーディネーターの能力によって、学生の意欲の上下や提示できる機会を大きく左右する、個別面談の場面に焦点をあてて、とりわけ「コミュニケーションに課題を抱える個人」に対しての対処法を向上するため、必要なプログラム開発を行った。なお、この取り組みについては、発達障害の若者などの就労支援といった事業を手掛けており、仙台・石巻で多くの若者と接している NPO 法人 Switch と共同で行った。

(4) 学生の主体的な活躍を促すメンターの発掘

■「仙台ミラソン」におけるメンター活動

上述の通り、本事業で研修やイベントを行う際に、すべてを自前で行うだけでなく、社会人を中心とした講師を依頼して、よりニーズに沿ったものを提供するとともに、その場限りの関わりになるのではなく、その後も継続的に学生支援に関わってもらおう働きかけを実施したが、メンターの発掘という観点では、メンターの定義を明確に定めていなかったほか、関係構築がコーディネーターごと属人的に行われていたこともあり、誰がメンターか、そうでないかの区分、リスト化ができていない。

今回は、取り組みを行う過程で、これまで関わりのなかった社会人が参画し、関わりを深めてメンター的な活動に至った実績のひとつの例として、仙台市と共同で行った「仙台ミラソン」におけるメンター活動を挙げる。

仙台ミラソンは、仙台市の地域課題を解決するアイデアを、アイデアソンという手法で考案したうえで、実際にチームでそのアイデアの実現に挑むというプログラムで、アイデアの起案から実践まで、仙台市職員が伴走することがひとつの特徴である。

「障害理解の促進」というテーマで活動したチームでは、はじめ前提となる政策の背景共有や知識面のフォローという観点で、2名の市職員が伴走していたが、アイデアの考案・実践という過程で、学生メンバーと共に活動し、フィードバックや実践活動に参画するようになった。市職員として最低限果たさなければいけない役割は、知識面のフォローまでであったが、学生の取り組み・熱意に動かされ、職務の範囲を超えてより深く関わっていただいている。

